
高校生のリリカル爆走

建宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生のリリカル爆走

【Nコード】

N0284X

【作者名】

建宮

【あらすじ】

死因は何だったか・・・そう確か女の子が車に轢かれそうだったから助けた時・・・ではなくそのあとに助けた女の子から全力で拒絶されてフラッと道路に出たらバーンとかだった気がする

プロローグ

一言で言うなら俺は転生者。そして此処は大自然

「なんでさー!?!」

（この発端は数十分前）

「お主は死んだ」

「はいはいはいい・・・はい?」

目の前の爺さんはそんな言葉から会話を開始した

普通はもっとなんて言うか。せめて初対面なんだし挨拶くらいはしようよみたいなさー

「混乱するのも無理はない。が起きてしまったものは仕方ない」

「仕方ない。ああ、確かに起きたもんはしゃーない」

「じゃろっ? 例えそれがワシのミスでも仕方ない」

「そうそう、例えお前のミスでも仕方ない」

「じゃろって、んん?! 待て! 待つんじゃ! 言ってる事とやってる事が!」

俺の脳内ではキチンとそう処理したのだが体はそうも処理してくれなかったようだ

俺は無意識の内に爺さんをボコボコにしようとして動いていたらしい

「まったく最近の若いもんは」

「るさい、で? あれ? よくある転生系か?」

「うむ、説明が早くて助かるのう」

確かに若干オタク気味の俺としてはこのシチュエーションは嬉しいが!!

シヤナ三期を見れない内にポツクリ行くのは思いのほかイライラする

「あと二、三発くらいは」

「駄目に決まっておるじゃろう」

「駄目か」

「駄目じゃ」

そこまで言うなら仕方ない

「考えてる事とやっている事が違う?!?!」

どうやら俺は余り諦めの良い方では無いらしい

「だとするとアレか。今度は転生特典か」

「そうじゃ、お買い得じゃぞ」

殴った所が多少腫れている爺さんが何かトランプ的なカードを数枚取り出す

「お買い得ねー」

「そうじゃぞ?この中から好きなカードを選ぶが良い」

「好きなカードねー」

悩むなー……ん?これってハズレとかあんのかな?それだったら

マジやだなー

まー転生ってこのシチュだけと十分アタリなんだろうけど

一枚か

「これだ！」

「ちょ！お主！」

悩みに悩んでブリッジ体制までして悩んだ結果

俺は全てのカードを鷲掴みしていた

「……。」

「……お主い」

爺さんは俺を残念な物を見るような目で見る

「こつち見んなキモイ」

俺は結構強欲らしい

「全部取る奴があるか？」

「す、好きなのって言っただろ！誰も一枚とは聞いてない！」

まるで子供の言い訳を言う俺は高校生

「まーあーそうじゃのー」

「み、見るなやい」

「まーいいわい。ーっって言い忘れたワシのせいでもあるよっじや
し」

心が広い爺さんに心の狭い俺は精神的ダメージをくらう

「では特典も決まった事じゃし、さっさと送ろうかの」

「っつとそう言えば俺は一体何処に飛ばされるんだ？」

「ん？惑星」

「大雑把過ぎる?!」

よくある様に足元に穴が開く

がかしい！予想していた俺に避けられない物は無い！

横に軽く跳ぶ

「がそれもまたお決まりの行動じゃよ」

穴があつた

あげくに落ちる瞬間に見えたが最初に開いていた穴の周囲全てが穴だらけだった

用意周到な爺さんに驚き

くで現在く

「惑星・・・か」

ある意味悟りを開きそうな俺

惑星って括りは広すぎるだろうが。・・・まあ森があるんだから生物がいるのは確かなんだろうけど

「お腹すいた」

ここは野生的にサバイバルでもしょうか

ああ、でも俺。雑草や木の実の知識とか知らんから何が食えるか分かったもんじゃねえな

「いつそ次に出会った動物を特典能力でブツチして食べるか」

またもやお決まりでガサゴソと音がして草むらから何か飛び出す

「よっしゃー！食べ物ゲットオオオー！！」

「た、たべ？！わたしをたべちゃうのお？！いやああああー！！」

草むらから出てきたのは少女だった

しかもスツゲエ美少女だった

やっべ、食べる話・・・どしよ？

プロローグ（後書き）

始まりました転生モノ！転生系は初めてですから妙な所もあるでしょうが気長に見てくださいねっ！

一つ一つの文字数は少ないと思います！
では次回！

一話／side 雨水／

前回のあらすじ

俺、お腹減った 草むらから何かが出てきた！ 草むらから美幼女が現れた！ 勢いで食べる発言 美幼女、恐怖 そして現在

「お、おいしくないですよお」

「う、うん。ん？いやむしろ美味しそう？」

ジュルリ

「ひょー」

□□□□！ペドドド！

「はっ！」「めんめん、ちょっと道に迷っちゃってー」

「まいじゃん？」

「そうそう、行くあて無しの迷子さんなんだよね。アハハ」

「かえるおうちないの？」

美少女は恐る恐る俺に近付き会話のし易い位置で立ち止まる

食う発言はチャラにしてもらえたようです

「無い！・・・かな？」

此処は日本じゃなさそうだし仮に日本でも前の家が存在してるとは限らない。ってかそもそも家があったとしてそこに俺の居場所は無いかも

・・・ん？待てよ

いまの俺ってホームレス？

「わたしとおんなじ」

まさかの衝撃発言

こんな美少女が俺と同じくホームレスとは・・・危険だ！

「なら一緒に行こう」

男は狼！男は獣！男は・・・んーと。そだ、男はスケベ！よし三拍子揃った

「いいの？」

「もちろん！」

「うふあ」

「ん？」

「うううああああん！！！！」

何故か泣き出してしまった。女の子って難しい・・・じゃなくて

「ちょ！え？！なに！俺悪い事でもしちやった？！」

「あう、ふええちがうの。わたし、うれしくて」

何だか純粋な子供の心を見ると・・・真つ黒な大人は酷く傷つく

「くっ！これは強敵だ、深く抉ってくるぜ」

「だ、だいじょうぶですか！いや！しんじゃあー！」

いや、心の傷ですから肉体的には問題無いです

そんなこんなで美少女と一緒に旅をする事になりました

「あ、これはたべれますよ」

「ほんと？サンキュ」

「いえ」

美少女の前に住んでいた家はこの辺らしくこの辺の動植物にはとても詳しくかった

ついでながら驚く事に美少女はファンタジー生物まで持っていた

「キュクルウ」

ドラゴン（幼態）である

「毎度美味しそうだな」

「な！フリードはともだちです！」

美少女は俺からフリードを遠ざける

別に本当に食おうとは思ってないの……いまは……

最初はマジで非常食と考えていた

「それにしても俺達は一体何処を目指して歩いているんだろう」

「さあ？わたしもむらからは、でたことありませんでしたから」

とは言え一定の方向に向かって歩いていけばその内、森脱出は出来るだろう

「ギャオオオオ！！」

「見てない見てない」

「りゅうしゅ？！なんで！！」

「知らない知らない。俺はあんな表現し難いのを竜とは認めない。リオレウスくらい持ってこいバーカ」

目の前の形容し難い竜種さんは明らかに涎を垂らして俺等を見ている

「ね、ねらわれてせんか？」

「キャラ、良いか？良い事を教えてやる」

「はい！なんですか！雨水さん！」

初名前登場。美少女ことキャラ・ル・ルシエちゃん、俺こと雨水秋春・・・あれ？俺だけ名前でキャラは俺のこと苗字で呼ぶんだ

「耳を塞げ。目を閉じる。さすれば新たな道がひら

「ひらきません！しぬきですか?!」

セリフの途中に割り込まれた

「ガウガー!!」

「そだ！フリードがいた！」

「むりですって！フリードはまだこともです！」

そうか・・・なら仕方ない

「逃げよう」

「さんせいです」

一、二、三

「走れ!!」

「ガグルガアアアアアアア!!」

「おつてきてますよおおお!!?」

大丈夫。俺等はまだ死なないはず・・・たぶん・・・きっと・・・
だよな?

一話〱side 雨水〱(後書き)

じゃじゃーん！連続投稿！大した意味は無いし書ける内に書いちゃ
つとけー！的な勢いです！

次回もお楽しみあれ！

二話〱side キヤロ〱

私の村は古くから召喚魔法を継承していた小さな村だった

その村で私は小さい頃から大きな力を持って、その力を恐怖され追い出された

私は村から出てすぐにどうしようかと森を彷徨っていると雨水さんに出会った

初めは変な人と思っていたけどとっても良い人で面白い人

「ほんとうにであえてよかった」

「ちょ！キヤロ？！そんないまにも死にそんなセリフ吐かないで！」

「？」

私は雨水さんに手を引かれ竜から逃げる

もっと私が召喚魔法を上手く使えてたらこんなのヘッチャラなのに

「あ！そだ！」

「どうしたんですか？！」

「特典があつた！」

「とくてん？」

雨水さんは私を草むらに隠すと竜と向き合った

「さあ！やってやんよー！」

・・・。

あれ？

雨水さんは構えた状態でダラダラと冷や汗を流し始める

「使えねえ」

「え？」

「が！しかない！そこで諦める俺では無い！」

痺れを切らして竜が雨水さんを襲いそうになった瞬間、バツ！と手を前に突き出して竜を止める

「なにを」

「良いか！竜よ！」

「グルウ？」

「このお方を誰と心得る！」

「わたし?!！」

雨水さんは私を竜の前に突き出すと私を堂々と竜に紹介する

竜は当然此方の言葉は分からないので首を傾げている

「このお方は村一番のお偉いさんの娘！」

「ちがいます」

「お前も竜の端くれならその意味が分かるだろ！」

「たぶんことばつうじてませんよ?」

と思ったのだけどビクッ！と竜は振るえ後ずさる

「キャラの村はお前から竜の長と代々交流してきた村!・・・たぶん」

「あ、それあってます」

長って言うか、この辺の守り神なんですけど

「だからお前！もしこの娘を襲おうものなら！お前から長が黙ってないぞー！」

「あれ？それだと雨水さんが・・・」

「え？」「

ほら、竜が雨水さんを標準付けちゃったよ

「あれえ？なんでえ？」

「さあ？」「

「竜！キャロに免じてこの場は譲ってやるっ！」

「なんでえらそうなの？」「

「グルウグルウ・・・ウ？」

竜は少し考えれる仕草を見せると背を向けて歩き出した

「よっしやー！」

「すごい？のかな？」

こうして私達の危機は去った

「さて！今日は此処で寝よう」

竜に追われたせいで折角真っ直ぐ行っていた道も分からない状態になり夜も遅くなってしまったので洞窟で一晩過ごすことになった

「ふっふーん」

男の人と一緒に

いやいや、そんなの村でもよくあった。うん、あったはず。．．．
あったっけ？

「あーそうだー。キャロー」

「ひゃいー！」

「なに慌ててんだ？・・・まあ良いけど、奥になんか湯が沸いてたからそこで体でも流してきたら？」

「あ、ありがとうございます」

行く？うん、お礼言った以上は行かないと

私は奥に進んでお湯の沸いている小さな湖の淵に来る

後ろを振り返るとギリギリで雨水さんの背中が見える・・・つまり雨水さんからすれば後ろを振り向けば私が見える

「わたしはごども」

そう自分に言い聞かせて服を脱ぐと湯に浸かる

「湯加減どうだー？」

「キユクルウ？」

「あひゃへいひゅい！？」

「なに言っているんだ？」

雨水さんがフリードを頭に乗つけた状態で洋服を畳んでおいた辺りに立って私を見下ろしていた

「溺れてないか不安だったがどうやら足の付く程度の深さだったみたいだな」

私を心配してくれたらしい

「にしても」

雨水さんは目を凝らして私の体をジックリと見る

「んー」

「なんですか？」

「怪我は無いみたいだ。森の中を走ったから擦り傷くらいは覚悟してたんだが」

「ええ?! そつちですか?!」

女の子としては少しは気を使って欲しかったです

「？」

雨水さんが完全に私を子供扱いしている事を肌身に感じました

二話〱side キヤロ〱(後書き)

さっそくチートかもな特典披露?!と思われましたがこの主人公!
チートだけど早々楽しんでチートにさせる気はありません!

以上!

あ、誤字等ありましたらご指摘下さい

三話 side 雨水

前回の失敗により俺の爺さんから貰った転生特典が判明した

それは全部で六つ

説明は面倒なので簡略化させてもらおう

一つ、万物は全て数字で語れり。

これは世界のありとあらゆるモノをステータス化して視覚情報として取り入れれるっぽい

二つ、天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。

カリスマ性の向上、良く分かんが生物を纏めるのが上手くなったらしい

三つ、我が後ろに道が有りけり。

他人に教える事がとても上手くなったらしい

四つ、全ての事象を観測する者。

ようは単純に物覚えが良くなったらしい

五つ、若き日の思い出、老い日の勇姿。

何でも年齢操作系の能力らしい、自他ともに可能と

六つ、白紙不明

唯一真つ白のカードで何がしたかったのかサッパリ。もしかしたらこれはハズレくじの可能性あり

総合的に判断して・・・戦闘に使えるそうなのが無かった、と言うか
爺さんのネーミングセンスにビックリだ

厨二病も真っ青な痛々しさ

まあジツクリ考えれば使えそうなんだろうけど咄嗟に使えるのは皆
無だった

「つすひさぁん」

さて現実逃避もこれが限界か

幾ら美が付く女の子でも幼女に手を出しちゃ駄目

幾ら隣に寝ているキャラの寝顔がとても可愛くても人間我慢が大切

「クルウ？」

「おう、フリードか」

先程からフリードが俺の服を噛んで何かから引き剥がそうとしている

「あふ、あん、ふぁ？つすいさん？」

「おはよ、キャラ」

「・・・ちかい」

恐ろしい事に何時の間にかにキャラ口を抱き着いていた

あれ??マジでいつから??

「ハハハ、ごめんごめん」

「・・・。」

色の無い瞳でキャラ口はジトーっとな俺を見つめる

やめ!そんな目で美幼女から見られてると何かに目覚めそう!

「まあいいです」

「はあ」

許して貰えたところで朝食

何か食べそうな薬草と木の実。正直肉や魚も欲しいがホームレス生活なのだから文句は言えまい

「マズッ」

体は正直

「がまんしてください」

「キャラは平気なのか？この味」

「えいようあるんです」

「いや味の話を・・・」

「えいようがあるんです！」

不味いと思ってるんだな

我慢強い子だな、お兄さん尊敬しちゃうっ

「早く人の住んでる所に出て仕事探さないとな」

「ですね」

「止まれ！此処は保護観察区域で関係者外は立ち入り禁止領域だぞ
！」

何処からか声がした

俺とキャラ口は周囲を見渡すけど誰もいないので空耳として処理

「疲れてるんだろっか」

「そろそろきゅっけいします?」

「キユクル」

その場で休めそうな場所を探し飲み水を取り出す

「つて！貴様等！話を聞け！」

「キャラ、ごめん。俺ちよつと寝た方が良いかも」

「わたしもです」

「キユクツ！キユクツ！」

ん？どしたフリード？

上？

・・・上

人が空を飛んでいる、飛ぶって言うか浮くだなアレは

「キヤロ、あれなに？知り合い？」

「かなりきよくのかたでは？」

「管理、局？」

何の管理だろう？

「ようやくか、でだ、貴様等そこで何をしている」

「休憩」

「きゅうけいです」

「キユクルウー」

カチツとスイッチを切り替えるような機械的な音がして視覚情報が
変わる

時空管理局自然保護隊 魔導師ランクC 飛行魔法使用中 敵意無し

必要な情報を必要なだけ確認する、でない则表示情報が多過ぎて面倒。全力で見ようと思えば人としての構成情報まで見えてくる

お？意外と使える能力の予感！

「あれだな。動物愛護団体の人だ」

「どうぶつ、あい・・・だんたい？」

キャラには少し難しい単語だったようで途中を省いて発音した

「此処が立ち入り禁止区域と知っているのか」

「知らん」

「へえ〜はつみみです」

「キュー？」

「・・・そうか。此処は立ち入り禁止区域なんだ、なので外に出て欲しい」

「案内を頼む！」

なんだかなーと言った感じで局員の方は此方まで落ちてきて道案内

をしてくれた

え？此処って就職出来そうな場所が無いの？

三話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

およそ1500〽2000を目処に書いてます！

にしても特典能力名。我ながら痛々しいネーミング！アハハ〽

四話〈side 雨水〉

前回のあらすじ

起床 キヤロ枕の抱き心地が良すぎる キヤロに冷めた目で見られる 何かに目覚めそう 朝食 マズッ 職を探して放浪 人が空から声を掛けてきた 道案内をしてもらう 此処一帯に就職出来そうな所は無いですよ どのよ?

「でー!」

動物愛護団体モドキの人達の所にお世話になる事になった

「う・す・いさん?」

「おっと手を動かさないとな」

「そうですよっ」

キヤロに促されて食材を切っていく

俺等の仕事は料理担当

「ん?キヤロは結構手付きが良いねえ、将来は良いお嫁さんになり

そう」

「えっ?!あ、あう、わ、わたしはつすいさんの」

「キャラ?！鍋が!」

「え?あ!すみません!」

危ういところだったが如何にか間に合い難を逃れる

そしてやっぱりこんなキャンプみたいな所での定番。カレーを完成させる

「たんと召し上げ!」

「おおっ!スゲエな!お前等!」

「ほんとお美味しそう」

ちょうど団体が帰ってきたので配膳を行なう

「そいや、お前等ミッドには付いてくる気あるか?」

「ミッド?」

「首都だ、首都」

首都かー、それなら就職先は多そうだ

「行く！行くこう！今すぐに！」

「今は行かねえよ。こっちの仕事が終わってからな」

「チツ役立たず」

「んだとっ?!」

「けんかはだめですよっ!!」

「はい」

何故か俺だけおたまで殴られた

キャラが団体の女性に囲まれてドンドンと強くなっていく・・・

「ふうー腹一杯」

「ですねー」

「キュツクー」

食事も終わり、今度は食器洗い

「おう？何だお前等、仕事熱心だなー」

俺等を道案内してくれた団体のおっちゃん

「どした、おっちゃん。こっちに何か用か？」

「様子見だ。様子見・・・にしてもお前等、なんか夫婦みたいだな？兄妹だっけ？」

「ふっ！ふうふ！ですか?!」

「違うぞバカヤロー、俺とキャロは・・・ん？旅仲間かな？」

「なんだそりゃ」

「わ、わたしはふうふが・・・」

え？なんだって？

「そうそう、伝えとこうと思ったんだがミッドには四日後に行く予定だからな」

「そうか、サンキョおっちゃん」

「おう！」

良い奴だな、おっちゃん

二日後

事件が起こった

まあ俺にとっては大した事件でも無かったはずだし関わらないつもりだったのだが

「おらあ！お前ら動くなよ！動くと言いつくがどうなっても知らねえぞ！」

「雨水さん！助けて！」

「黙れ！」

相手はこの辺一帯を荒らす密猟者らしい

愛護団体の皆が追っていたのだがこのキャンプに入られ偶々居合わせたキャラを人質に取らってしまった

「クソッ！」

「チツせめて戦闘に向いた特典があれば」

向こうは武器持ち人質持ち

密猟犯罪組織末端 魔力ランクD 敵意有り 所有魔法はプロテク
トとシューター

・・・組織？

「おっちゃん。もしかしてコイツって仲間とかいる？」

「ああ？！いないはずだが・・・」

「キャラ口を無事に取り戻す方法か」

戦力的には余裕で勝っているがキャラ口を楯にされている以上はそうも言えない

しかも、もしかしたら近くにアイツの仲間が潜んでるかも

最悪だ

「密猟者！聞け！取引がある！」

「な、なんだ！」

かなりの焦っている。味方が居るならもつと余裕に構えて居そうだが、居ないのか？捕まりそうだったから切り捨てられたとか

「その子を放せ！そうすればお前の条件を何でも一つ叶えてやろう！」

「信じられるか！」

「ん？だがいまのお前の状況はかなり悪いぞ？逃げるにも此処はお前にとって敵の本拠地、既に囲まれたようなもんだ。逃げるのはまずもって不可能」

「・・・へへっ、そんなのこイツがいれば」

「ひい」

持っていたナイフをキャラの首に突きつける

マジでアイツ追い詰められてるよ・・・思考も鈍ってるみたいだし交渉がし難い

表情に出さずに悩んでいるとおっちゃんは何やら俺に目で合図

うしろのくさむらにひそませている

成る程、このまま俺に犯人の注意を惹きつけて置いて欲しいって事が

「そいつが居れば何だったんだ？」

「あん？」

「もしお前がそいつに危害を加えたら本当に歯止めが切れてお前は
終わりだぞ」

「くっ……い、いいのか！お前は！コイツに消えない傷が付いて
も」

「ハッ！別に良いに決まってるだろ、勘違いしてないかお前は俺と
そいつは他人で更に言えばそいつは別に此処の自然保護隊の関係者
でも無い。この意味分かるよな？」

犯人は苦い顔をするがキヤロは放さない

……まだか

「良いんだぜ？ほら、やれよ」

「……雨水さん」

「ほ、ほら！良いのか！コイツもお前に助けを求めてるみたいだぜ

！
」

「誰も求めた結果が手に入る訳じゃねえよ。いまのお前みたいに
な」

「な・・・マジかよ。コイツ」

警戒が緩んだ

そう感じた瞬間に犯人のナイフに光の縄みたいなのが幾重にも絡ま
り取り囲んでいた保護隊の皆で犯人を取り押さえた

これで犯人も捕らえキャラも無傷で取り返す事が出来た・・・だけ
どキャラはそれから簡易テントに引き籠もった

四話〈side 雨水〉（後書き）

主人公は高校生くらいの思考力で考えれる説得で敵に挑みます

なので正直、いやいや相手も色々覚悟してんだしその説得で如何に
かなる訳ねえだろと言つ話が持ち上がりますが・・・まあ追々と説
明するつもりです

五話 〱 side キヤロー

私を助ける為だったって事は分かってる

「キヤロー！ごめんってー！ほんとあんときはアレが最善だったんだってー！」

簡易テントの外で雨水さんが私に謝っている

私を助ける為だったとは言えあそこまで言われるとは思ってなかった

雨水さんと私がなんの関わりの無い他人だなんて言っていて欲しくなかった

私達と仲良くしてくれた保護隊の皆と関わり無い同士だなんて言うて欲しくなかった

「キヤロー！お腹すいてるでしょー！ご飯あるから出ておいでー！」

更に言うなら食べ物で女の子を釣ろうとする雨水さんの根性が納得できない

私はそんな食いしん坊じゃないです

「いません！」

「え？いらない？キャロに食べて欲しくて愛情込めたのに」

「食べます！」

・・・あ

したり顔の雨水さんがオムレツを持って私の目線に屈んでいた

「うんうん、やっぱりキャロには食べ物だなー」

馬鹿な私を憎みます

目標のミッド行きの日

あれから仲直りをしたとは言え雨水さんも負い目を感じているようで一つだけ何でも出来る限りのことをしてくれと約束してくれた

「ありしたー！」

「ありがとうございました！」

「キョクルー！」

「おう！何時でも遊びに来いよ！」

私達は保護隊の皆に別れを告げてミッドで雨水さんの就職先探しの旅を始めた

「これより！局員認定試験を始める！」

「はい！」

料理屋。ホテル。一般企業。様々な所を巡ったが私と言う荷物持った雨水さんを雇ってくれる所は見付からなかった

そして私達は保護隊の皆を思い出して局員になってみようかと考えた

「まずはデバイスの起動！」

「セットアップ！」

「え？デバイス？ああ、さっきのかセットアップ」

私と雨水さんは局員の服装に変わる。たぶんセットアップ時の初期設定なんだと思う

雨水さんは驚いている。そう言えば雨水さんは魔法を見る度に驚いていた・・・あれ？もしかして魔法を知らないんじゃない

「次！射撃魔法！」

「はい！シュート！」

「んん？成る程、やっべMPが足りませんかとか出そうだ。シュート！」

ポスンと音がして雨水さんの魔力弾は消えた。魔力弾の形成に失敗したんだと思う

「・・・次、儀式魔法」

「え？儀式魔法ですか？！」

「はい、小規模でも構いません。これはランクを決めるテストなので」

「はい」

私は詠唱を始める

横目でチラっとだけ雨水さんを見ると何だか壮大な呪文を唱えていた

・・・ただし魔力が全然通ってなかったけど

その後の色んな事が続く

「以上！終了です！」

結果

雨水さん 魔導師ランクF 非戦闘員 一般局員

私 魔導師ランクC レアスキル持ち 三等陸士

あれ？役職上では雨水さんを超えちゃった

「戦闘外要員って訳か、まあ別に戦闘したい訳じゃないから良いかな、キャラ口三等陸士殿」

「雨水さんのいじわるっ！」

敬礼した雨水さんは何だか遠く思えた

私達が管理局入りして早一週間

本当早いな。私の召喚魔法はまだ未完なので戦闘では役立たずだけどデスクワークなら慣れたから結構イケてると思う

「よ！キャロちゃん！あれ？雨水は？」

同じ部署で仕事をする人達はもう気軽に私達と話してくれる

「雨水さんですか？さ、さあさっきお偉いさんと会ってくるって出掛けましたけど」

「お偉いさん？ああ、アイツ情報整理や講師だけは得意だからな」

「そうなんですよ。雨水さん本人は他人任せ嫌だなーとか言ってますけど」

「ハハッ、確かにアイツは教えるのは得意だけど自分はよええからな」

「む……。」

「お？っとなぞ覗まんできて悪かったってキャロちゃんの彼氏

は強い強い」

か、彼氏?!

いや私と雨水さんはまだそんなんじゃない。まだ、そう、まだだよ!

「アツハハハ、ほんとに可愛いなキャロちゃんは。キャロちゃんはウチの部署の花だよ!」

雨水さん遅いなあ・・・今日は一緒に帰れるかな?

五話 〽 side キャロ 〽 (後書き)

行き成り訳の分からない技術の魔法を使用しろと言われても当然不可能な主人公でした

六話 〱 side 〱 雨水 〱

前回のあらすじ

仕事搜索 特に秀でた物の無いので中々受からず 仕方ないので局員になってみよう 魔力はあったが魔法は度下手 まあそれでも戦闘だけが仕事では無いので非戦闘要員として採用 デスクワークは初体験（高校生ですから） 中々不慣れだが万物は全て数字で語れり（痛々しいので自分では観察眼と呼称）を使いロストログア専門の情報整理担当就任 我が後ろに道が有りけり。（一々痛々しいので講師の才と呼称）が何処かで発揮されていたのか何と無くアドバイスを聞いた偉い人がスカウトしてきた でいまの生活に至る

「 たっ だいまー! 」

現在俺は局の独身寮に住んでいる

まあ節約だわな

「 おかえりなさい! 」

「 キュック! 」

エプロン姿で出迎えてくれるキャラ口を見ると何時もながら感激してしまいそうになる

最近少し背が伸びたらしいし幼女扱いは悪いかと思うので今度から美少女と称そうと思う

とにかくこんな美少女がエプロン姿で出迎えてくれるなんて隣の同じ独身寮に住む同僚から唾を掛けられそうだ

「料理中だったか？って言うか今日は早いな」

「ん、ちょっと」

キヤロが一瞬だけ暗い顔をしたのを俺は見逃してはいなかったが今は放っておこう

美少女の料理が先だ

「あの、すこしだけ話をきいてくれますか？」

「料理が先だ」

「ええ?!」

あ、口に出す言葉じゃなかった

人間は誘惑に弱い生き物だと信じて疑わない！

「もう！雨水さんってば！」

「あははー、ごめんごめん。キャラの作ったご飯の匂いが凄い誘惑で」

「はあーなら食べながらでいいですから」

「うん」

俺が箸を進めるとキャラは俯いた状態でポツリポツリと話し出す

キャラよ・・・魚の目玉の部分をそうグリグリとしないでくれ・・・
ちよっとグロい

「じつは、今日もフリードの竜召喚をしっぱいしちゃいまして」

「ふえーひっはい、ほれはひゅごい（へー失敗、それは凄い）」

「ふざけてます？」

「ふえんふえん（全然）」

「食べるかしやべるかどっちかに」

「。。。。」

「喋るほうにせんねんして下さい」

え？せっかく食べる方を選んだのに・・・

って言うかさつきは食べながらで良いって言ったよね？

「そつだ！雨水さん！わたしに魔法制御をおしえてください！」

「ふえ？ふぁんで？（え？何で？）」

「まだ・・・いい加減にしないと、フリードが火をふきますよ？」

「ん？！んぐつ・・・ゴホツ、ごめんごめん、キャラのご飯が美味しいから」

「なら許します。つぎはないですけど」

やっぱり褒められるのは嬉しいのかな？

それからキャラがこれまで悩んでいた事を打つけられる

キャラのあんな泣き顔を見たのはたぶん始めて。俺はそんな急激なシリアスに耐え切れず

「フリードおお」

無言を貫いていたフリードに助けを求めた……アツサリ裏切られたけど

なんとフリードは俺とキャロと一度ずつ見て食事を再開した

「すみ、すみません！こんな、めいわくかけるつもりじゃなかったんですけど」

「気にすんなって」

「きいてくれてありがとうございます」

「おう……飯、冷めたか。まあ美味しいから良いけど」

「あ、あた、あたためましゅー！」

ん？今更な気もするし冷えてても美味しいんだけどなー

「噛んだキャロ萌えー」

「フリードやつちやって」

「キュクー！！」

フリードの口からギャグを通り越した火力の炎が飛び出した

こんがり上手に焼けました？

最近キャラ口の俺に対する扱いが若干乱暴な件を一体何処に相談した
べきか考えながら先生と呼ばれるのも慣れた今日この頃

「良いか？キャラ口、そもそもお前のフリード制御ミスは技術面では
なく精神面が弱いせいだ」

「はあ」

「でその強化を図ろうと俺は考えているんだが当然策はある」

「たよりになります！」

「おっ！」

俺は昨夜の内に纏めておいた資料と訓練メニューを渡す

この時の俺は講師の才を完全に舐めていた

六話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

原作よりキャラ口が少し強くなります

七話 side 雨水

前回のあらすじ

寮帰宅 キヤロ可愛い 美幼女から美少女にランクアップ キヤロ可愛い 魚の目が放送禁止な感じに キヤロ可愛い 相談を受ける キヤロ可愛い フリードに焼かれる キヤロかわ・・・ キヤロに講師開始 で・・・

「後悔先に立たず」

「あははっ 秋春！おもしろーい」

目の前にはキヤロ似のナイスバディのお姉さんが立っている

この状況を作った原因は俺にある

ほんの些細な事だった

特典能力の一つ。若き日の思い出、古い日の勇姿。（年齢操作と呼称）を試そうと思ったただけだ

そして身近な実験台がキヤロだったただけだ

「えと、キヤロ・・・さん？」

「ん？どうしたの？秋春、変な物でも食べた？」

近ツ！近い近い

こんな美女に迫られるなんて想像もしなかった

ってかキャラ口って成長したらこんなんだ

「なるほど、年齢操作は肉体だけでなく精神も成長させれるのか」

「ん？つと言つか秋春ちょっと若くなった？」

「お前が年老いたんツ！」

殴られた

しかもグーで

「あ・き・は・るうゝ？女の子に老けたなんて禁句だよ？」

「ちょ！ま！なにその魔力パンチ！」

「え？秋春が考えたんじゃない・・・ほんとに如何したの？今日の秋春変だよ？」

そもそもさつきから呼び方が秋春って親しくなってるし

「えつと俺達ってどんな関係だっけ？」

「え？」

笑っていたキャラの顔がどんどん曇って涙を流し始める

「ごめん！ほんと！話を聞いて！」

泣き止まないキャラに如何にか今までの経緯を説明する

暫らくしてようやく理解出来たのかキャラは納得顔になった

「あー、それで若いのね・・・ん？だとしたら私にとって此処は過去って事？」

「え？あ、そうか」

「へー秋春にそんなレアスキルがあったんだ」

「で？俺とキャラの関係は？」

「それは秘密！だってそうしないと詰まらないでしょ？」

密着した時に当たった柔らかい感触が何とも言えず顔を赤らめてしまった

「ん？あー！秋春ったら、ふふっそう言うところは一緒だね」

「・・・あ、そう言えばフリードの制御は上手くいってるか？」

「え？あーあの時の・・・あははっ！安心して！秋春は教えるのは天才的だから！」

「のは？」

と言う事はやはり俺本人は余り強くはなっていないのか

失言と気付いたキャラはバツと顔を背けてアハハと苦笑い

「さて、そろそろ戻してよ。このままだと色々ウツカリ喋っちゃいそうだから」

「分かった」

「じゃあね、秋春」

この後のキャラにさっきまでの記憶は無く本当に成長を遂げていたようだ

前回の実験で自分の能力をある程度把握し、改めて俺TUEEEが
実現できない可能性アップを実感した

「はあー」

「うーす、どした？雨水」

「おお、ヒューズか」

コイツはヒューズ。俺と同じく非戦闘要員で同じ部署の同僚

「いやほらキャロみたいなお小さい子までもが戦いの場に出てるのに
大の大人の俺らがなーっ」と

「ハハツ、そればかりは仕方ないさ。でもお前さんはまだマシだろ
雨水先生！」

「あんまり好きじゃないんだけどな、その役柄」

バンバンと強く背中を叩かれ渋々モニターに視線を移す

隣ではヒューズも俺と同じくらいの速さで仕事をしている

「そいやお前管理局のエースって知ってるか？」

「あ？知らん」

「だよなー、お前さん辺境の地の出らしいし」

「るさい」

「わりいわりい、何でもリンディ提督が持ってきた若いエースで入りたてで局員をバタバタ薙ぎ倒してるらしいぜ」

「そりゃ・・・なんて言うか・・・」

「恐ええな」

「ハハッだな。俺達には縁の無い話だ」

「ん？つと時間だ、行ってくる」

「外回りか？」

「士官学校に講師だよ」

「ガンバ雨水先生！」

まったくこんな年の人間に講師だなんて管理局はよほど人材不足らしいな・・・って勤めてみてそれは身に染みる程分かってるんだけどな

七話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

年齢操作は下手に自分に使い若返らせちゃったりすると転生前に戻って戻れなくなるので基本他人掛けのスキルになりそうな予感

感想お待ちしております！

八話 side キャロ

どうも、局勤め一年のキャロ・ル・ルシエです

何故か私が訓練所を破壊しているといまエースと名高い人の目に付いたそうです

本当に世の中不思議です

「始めまして」

「は、はじめ！まして！」

「リラックスして。ね？」

「は、はい！」

金色の長い髪の柔らかい笑みをしているこの人。確かフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官って名乗ったはず

なんで執務官なんて偉い人がいまだ三等陸士の私に声を

「えっと確かキミは週に一回くらいのペースであそこで練習してるよねっ。」

「え、あ、はい。何時もすみません」

本当は毎日にもも行きたいけどあの迷惑そうに見る目がちょっと恐い
まあ何時も訓練所を滅茶苦茶にしてるんだから迷惑そうにされるの
は当たり前だけど

「あ、頑張ってる姿みてたよ」

「ありがとうございます」

「凄いね、その年で努力家だ」

「いえ、ぜんぜん成長してませんから・・・」

「そんな事ないよ、少しずつだけど確かに成長してる」

この人の言葉は嘘でもないし冗談でもないし自然と分かる。そんな
感じの声色をしていた

何だかタイプは違うけど雨水さんを見ている気分になってきた

雨水さんもこんな風に包み込んでくれるタイプの人だ

「あ、あの、わたしの用があつたんじゃ」

「そうだった」

ポンとうっかりしていたとした仕草は少し天然っぽくて可愛かった
雨水さんには合わせないようにしようっと

「もし、キミがよかったらで良いんだけど・・・」

「？」

「家族に、なりたいんだ」

「はい？」

このひとはなんと？

かぞくになりたい、かぞく、かぞく？ファミリーの事だよ、うん

「えと、その、あ・・・はい？」

「ごめんね、混乱させちゃった」

「い、いえ」

「実は少しキミの事を調べさせてもらったんだけど保護責任者が登録されてなかったから力になれないかなって」

ごめんなさい。その理由だとイマイチ分かりませんが、私に保護責任者が居なかったとして何故貴方がその保護責任者を名乗り出ようと思ったのか

私を手に入れた時のメリットとか無いですよ？家事は得意ですけど

「な、なんで私なんですか？」

「？」

「私がいにも孤児なんてたくさん」

執務官は少し寂しそうにして笑った

「ただ、うん、そう。ただ此処で練習をしているキミが寂しそうだったから・・・それを放っておけるほど私が良く出来てないって感じかな？ただの自己満足だよ」

此処での私が寂しそう？

それはそうだ・・・だって此処には雨水さんが居ないんだもん

「そ、そうだんしてからでも良いですか？」

「そうだん？」

「旅仲間に」

「え？」

今更だけど私と雨水さんの関係を人に教える時、旅仲間くらいしか無いのに気が付いた

私は雨水さんと一緒に住んでいる男性独身寮に帰るとすぐに今日の事を話す

「へーそんな物好きが居たんだな」

「ものずきですか?!」

「うん、ほら子供一人を育てるのって結構大変らしいし」

あれ？もしかして今日の雨水さんはちょっと真面目モード？

「んーそうか、訓練所の破壊を参考に所が引つ掛かるな。アレか？誘って来たのはテロリストか？」

「・・・フリード」

「ちょ！止めるフリード！俺は治癒魔法とかは無理なんだ・・・うわあああ！！」

あんな優しい人をテロリスト扱いなんて信じられません

そんな人はフリードの炎で丸焼きにするべきなんです

「さて、もういいですか？」

「あ、ああ、悪かった。テロリストでも人だもんな、きっと不良が猫を拾う感覚なんだろうよ」

「フリード」

「冗談！冗談だって！悪かったって、ふーん。テストロッサ執務官って言えば近頃噂のエースかヒューズから聞いた」

ヒューズさんから？最近私は雨水さんとは部署が違う場所になったからヒューズさんとも会ってないな

お菓子とかくれる良い人だったと思う

「別に良いんじゃないか？キャラが良いって思うなら」

「でもここは出て行くかもですよ？」

「局員同士だし会える時には会えるだろ・・・それに、今は平気で
も後々保護者が居ないってのは不便だからな」

本当は雨水さんに家族になって貰いたいけど雨水さんは父親って感
じじゃないですね

お兄さんは近いかもですけど偶に私の方が年上なんじゃと思う時と
があるし

それに私の目標は雨水さんのお嫁さんですしテストロッサ執務官の
申し出は渡りに船では無いか？

戸籍登録上他人なら結婚年齢になれば可能です

「よし！決めました！」

「おおー、で？如何するんだ？」

「わたし！テストロッサ執務官の子になります！」

「なら今度会った時に名前で呼ぶ許可を貰うんだな。名前で呼ぶつ
てのは親しい証だからなキャロ」

「分かりました！雨水さん！」

・
・
・
あれ？私って雨水さんの事は苗字で呼んでませんか？

八話 side キヤロ (後書き)

今更ながら苗字で呼んでいる事に気付くキヤロでした

九話 〱 side フェイト 〱

キャロ・ル・ルシエ。私があの子を見掛けたのは二ヶ月くらい前の事だった

あの子は週の終わりに訓練所に顔を出し迷惑そうな大人に何度も頭を下げて場所を借りていた

何でそこまでするのかとても気になって訓練の様子を少し見せて貰う事にした

あの子の目はとても真剣で何か一つの目標に向かって走っているような、昔の自分と被るような気がしてならなかった

そして訓練後に見せる寂しい気な顔がとても印象に残った

だから私は悪いとは思ってながらあの子の経歴を調べさせて貰った
小さな村の出身で村を追放された所を自然保護隊に保護されミッドで局員試験を受けて見事合格 現在保護責任者無しの孤児扱い 住んでいる場所は×××部署の男性用独身寮

「？」

何で男性用の独身寮に？

まあ流石に小さい子一人で生活はって事で多分保護隊の方の多い寮に居るんだろう

私は何度も見掛ける内に声を掛けたくなくなった

力になりたいって思った

だから保護責任者を名乗り出た

あの日から丁度一週間。多分今日もあの子は訓練の為にやってくる

「テストロッサ執務官！おはようございます！」

「おはよう・・・えとキャラotte呼んでも良いかな？」

「あ、はい！もちろんです！・・・そのわたしもフェイト執務官って呼んでも良いですか？」

「もちろんだよ！」

キャラは嬉しそうに笑うと訓練所の中に入る

そして真剣な目をして独自の訓練メニューを見ながら訓練を開始する

ん、どんなメニューでしてるんだろ？

「え、えとキャラ？」

「ふえ?! フェイトさ・・・じゃなくてフェイト執務官?!」

「さんで良いよ」

キャラのすぐ隣に展開されているモニターのメニューを読んでみる

・・・凄い

かなり考えて作ってある。模範的なメニューじゃなくてキャラの為だけのメニューって感じ

「これ、キャラが？」

「い、いえいえ! これは雨水さんが」

「雨水さん？」

何処かで聞いたような

とっっても最近だったような

「前にはなした旅仲間です」

「あー前も思ってたけど旅仲間って？」

「わたしが村をでてすぐに出会ったひと？」

「自然保護隊の人？」

「ううん、わたしとおなじで帰るところがないって言ってた」

それからもう少し話を聞いていたが段々キャラも「あれ？」と首を傾げる事が多かった

今度会って見ようかな

「あ！そうだ！フェイトさん！」

「あ、はい、なに？」

「い、この間のはなし！」

ドキリと緊張する

もし断られたら如何しよう

「わたしを！フェイトさんの家族にしてください！」

「・・・良かったあー」

キャラは少し安心して気が抜けた私を心配そうな目で見ている

「だ、だいじょうぶですか？」

「うん、大丈夫、嬉しくて。ちょっとね」

「よかったです」

今日にでも手続きしないと

あ、それに雨水さんにもやっぱり会わないとな

キャラの正式な保護責任者になったのは申請を通した次の日で実際の所は何か変わった訳ではないので少し現実的な実感には欠けます

ただどいまの私の緊張の度合いは稀に見る度合いです

恐る恐るインターホンを押す指が震えます

「ふあゝヒューズか？こんな朝っぱらから」

キャロの住んでいる住所から出てきたのは私と同じくらいの年の男性
多分、雨水さんだ！

「あ、あの！始めまして！フェイト・テストロッサ・ハラオウンで
す！この度はキャロ・ル・ルシエさんの保護責任者にならせて頂き
ました！」

「・・・あん？」

雨水さんは目を細めて目を擦る

そして私の顔をジックリ見ると一旦扉を閉めた

「あっ」

もしかして嫌われた？！

そう思っていたが中から何か楽しそうな声が

『キャロ！なんかお前の母親？いんぞ！』

『フェイトさんはお姉さんです！』

『ってか来るなら言えよ！何も準備してねえって！アイツ執務官な

んだから俺って失礼したらすぐ首飛ぶって!」

「あははっ! フェイトさんはそんな事しませんよぉー」

「嘘だ!」

「・・・フリード」

静かになった・・・歓迎はされてるよね?

「おはようございます! フェイトさん! いま雨水さん起きたばかりでシャワー浴びてますから入ってゆっくりしてください」

キヤロが笑顔で扉を開けて出てきた

それは良いんだけど何時もキヤロと一緒に居る、子竜のフリードが何か啜えてお風呂場らしき所に連れて行ったのは見なかった方が良いのかな?

九話 ｛ s i d e フェイト ｝ (後書き)

主人公の組織的地位は最下層付近なのでエースで執務官なフェイトには頭が上がらなかつたりします

十話 side 雨水

前回のあらすじ

早朝インターフォンで目を覚ます ヒューズと思い込み扉を開けると執務官殿 寝起きの状態なんてかなり失礼な状況で焦る 取り合えずキャラのせい にしてみたらフリードが火を吐いた 次に起きたのは顔面にお湯を掛けられてから 即効身支度整え再度玄関に居ない・・・ ほっとしてリビングに戻ると座っていた

「キャラ・ル・ルシエさんを私に任せて下さい！」

目の前にガチガチに緊張したテストロツサ執務官が座っています。どっちが上司なんだか分かってるのか？この人は

「ようはキャラを奪いに来たと・・・ふふっやれるものならやってみろ」

「ええ?!」

「雨水さん。いったい何時からねてたんですか？」

最近キャラが恐いです

「ゴホン、冗談はさておいて。キャロの事は有難う御座います、そして宜しく願います」

「え？あ、こちらこそ」

「さて、ところで今日はどのような用件で？」

敬語も出来る高校生なんだぜ！・・・これであってるかは知らんが

「あ、いえ、ただ挨拶をと」

「そうですね、それは光栄です。お噂はかねがねですよエースさん」

「恥ずかしい限りです」

「ところで些細な事ですけど何故キャロを引き取るの？」
「う言っ
ては変ですが変わり者ですね」

いや、マジで訓練所を破壊してる所を見掛けてスカウトとかクーデターでも考えているのではと思ってても仕方ないよね？

「その、なんて言いますか。放っておけない感じだったので」

「なるほど・・・百合な方？」

「なっ！違います！」

「ではキャラは嫌いっ」と

「ちがつ！違うよ！違うからね！キャラ！私は大好きだよ?!」

「え？あ、はい知ってます」

「ほほう、やはり執務官殿は幼女好きっ」と

何だかこの人、面白い人だな

あわあわと俺とキャラを交互に見るテストロッサ執務官は割と普通の女の子って感じだった

あ、そう言えばキャラ幼女は撤回してるんだった

あれからテストロッサ執務官殿とは割と仲良くなった。あ、フェイトって呼べって命令だったな

キャラはと言うとフェイトさんの所と俺の所をウロチヨロとしている

「死ね！」

「唐突だな」

「お前なんか死んじゃええ！」

何時もは冷静情報収集担当のヒューズ二等陸士

なんだか今日は情緒不安定みたいだ

「武装隊の花のテストロツサ執務官とお話なんて死んじゃええ！」

「お前も先日話しただろが」

「アレは仕事だ！そしてお前のはプライベート！全然違う！」

「分かった。お前がフェイトさんのファンと言う事は何だか凄く分かった」

メンドクセエ

報告ですが、晴れて何かの功績で俺も三等陸士にランクアップ・・・
ってこれが一番下位の階級名なんだけどね

キャラは二等陸士に昇格してたから結局俺の上官？に当たる位置だし

「にしても気を付けるよ」

「なんだよ、急に真面目に」

「ああ言うエリートの前は危険が付き物だ、キャラちゃんはまだ幼いし正直現場には早い」

「……。」

昔はキャラも同じ部署だったからか心配なようだ

アップダウンの激しい奴だな？

「幾らテストロッサ執務官が保護責任者になったからってキャラちゃんにとって頼れるのはやっぱりお前さんなんだからな」

「るせい。分かってるやい」

だから俺だって少しは訓練してんだろうが……全然成果でねえけどマジで何で他人の指導はこんな上手いのをそれを自分に応用出来ないかなー

あの特典他人限定と違って縛りでもあんのか？

「羨ましいなー！なー！俺と変わねえか？」

「……そうだな、俺がフリードの餌食になっている瞬間だけ変わってやるよ」

「そっちは遠慮」

ヒューズと暫らく喋っていたら上司に後ろから書類で殴られた・・・
あのハゲエ

十話 side 雨水 (後書き)

今後の参考までに聞いておきたいのですが、オリキャラは増やすべきでしょうか？

お気軽にご意見投票、宜しくお願いします！

十一話 side 雨水

あらすじ

キャラの保護責任者が正式にフェイトさんに決定 フェイトさんが挨拶に来る なんか素直だからかうと面白い からかい過ぎて次の日首飛んでないか少し不安になる 心が広いのかそんな事はなかった ヒューズに恨まれる ちよつとシリアス で親睦を深める為に遊びに行く事になった

「うーっす、待ちました？」

「全然待つてないよ」

「おなじくです」

「雨水さん！じょせいを待たせるとは何ごとですか！」

「キュツクルー！」

フェイトさん、謎の少年、キャラ、フリードの順でお送り致しました

「二人対一人でそんなに待つてないで決定だな」

「キュクー！！」

「お前は竜だろうか」

竜の数え方は匹だ！・・・たぶん

「ハハ、それじゃ行こうか」

「ですね、それにしても親睦深める為に遊園地って子供みたいな発想だな！流石キヤロ」

「え？これってたしかフェイトさんが・・・」

ん？

「こつこども・・・かな？」

「フリード」

「キユク」

え？俺なんか悪い事言った？

流石のキヤロもこんな所でフリードに炎を吹かせる事はなかったが代わりに噛みつかれた

「雨水さんっておもしろいですね！」

「そうか、まあそれは良かった・・・ところでお前誰よ？」

「え？」

いやいや、そんな悲しそうな顔をされても俺ってお前から自己紹介もされてねえんだぞ？

「・・・雨水さん」「

女性陣から冷やかな目が

「いやいや！待って！俺そいつの名前さえも聞いてない！」

「」「・・・あ」「

ようやく知れたがコイツはエリオ・モンディアル。フェイトさんが保護責任者を引き受けた子供らしい

まあキャラ（男ver）ってところか

「なるほどなー、一応知っていたみたいだか。俺は雨水 秋春な。さつきみたいに雨水でも、いっそ秋春でも好きに呼ぶが良い」

「秋春、兄さん？」

「「え？」」

「え？」

何故か見詰め合う女性陣とエリオ

え？え？なに？・・・あ、そう言えば俺を名前で呼ぶのってエリオが始めて？

「ジェットコースターかー久々だなー」

「の、乗るの？雨水さん」

「早そうですね」

「楽しみです！秋兄さん！」

フェイトさんとキャラ口は恐る恐るか。ま、そんなもんなのかな？

って言うか秋兄さんってちょっと微妙くないか？秋兄か兄さんかどちらかに別けるべきじゃないか？

ジェットコースター

「きゃあああああああ！！」

「いやっほー！！」

「はい！はいです！」

お化け屋敷

「きゃあああああ！！」

「やっぱり作りもんだな」

「張りぼてですか？」

コーヒーカップ

「きゃあああああ！！」

「そんなに早くないと思うが」

「回る！回る！回るううう」

ウォーターライダー

「きゃあああああああ！！」

「水ウゼエ」

「濡れますね」

巨大ボールプール

「きゃあああああああ！！」

「これは叫ぶ所か？つてかボール痛っ。エリオ！テメエか！」

「アハハ！楽しいですね！」

カフェテリア

「はあはあ、ゴホゴホッ」

「お前ら叫びすぎだ」

「だ、大丈夫ですか？」

カフェの屋外テーブルでくたあーと女性陣二人は倒れている

ん？叫ぶ様なアトラクションは俺的には最初の二つくらいだったが

「あゝくゝ、雨水さんってタフですね」

「キャラはともかくフェイトさんまで？」

「エリオは元気だね」

「フェイトさん？僕もつかれましたけど。楽しかったですから」

昼食が運ばれると俺とエリオは食べるが一人はまだ復活してない

ってかエリオの食べている量が異常だ・・・フェイトさんが払って
る食事代とか凄そうだな

「あれだな、フェイトさんは良い人だな」

「え？行き成り如何しました？」

「いや、なんでも」

こう言う時は男が払うべきだと意地を張って見たがやっぱ凄かった

一ヶ月分の生活費と同じくらいはあったぜ？

十一話〜side 雨水〜(後書き)

エリ才登場！

十二話 side エリオ

雨水 秋春さん。通称、秋兄さん

今日はフェイトさんもルシエさんも一緒では無く二人同士、男同士で会う事になった

「うああーだるうー・・・早いな」

ネクタイを緩め眠そうにしながら片手をパタパタして歩いてきた

反対の片手には仕事荷物を持っている

「ごめんなさい、急に・・・」

「ん？ああ、いいさ。待たせて悪いな、その辺の喫茶店で良いだろう？」

「はい！」

人は居るけどそれ程混んで居ない喫茶店を選び入る

「あー、で。何の用だっけ？」

「その・・・雨水さんが様々な場所で講師をしているって本当ですか？」

噂に聞いた話では訓練校や難関の士官学校を始め陸士部隊や武装隊の実戦部隊、教導隊のエリート部隊の所まで幅広く活躍していると聞いた

「講師は本当だがエリオが思っているような感じじゃないぞ？」

「？」

「んーっと、たまくに呼ばれては優秀な生徒いますか？とかこの子が最近伸び悩んでいるんですけどか持ち掛けられる程度だ。本職はロストロギア関係だしな」

つまり生徒を見定める選別眼と的確なアドバイスが出来るって事ですよね？

十分凄いやうな・・・それで本職は危険物のロストロギアって・・・

「あ、あの秋兄さんから見て僕ってみこみますか？」

「見込み？なんの」

「まどろしのです」

秋兄さんは何だか面倒そうな顔をして右肘を付く

き、気分悪くさせてしまったのかな？

「それは、フエイトさんの為とか？」

「それもあります」

「も？」

「はい、僕もルシエさんのがんばってる姿をみせてもらいました。そして僕ももつとがんばりたいと思っただし秋兄さんに追い付きたいって」

「あーあーあー」

楽しそうに首を何度も縦に振って携帯端末からモニターを表示させた

そこにはこう書いてあった

ロストロギア鑑定士 魔導師ランクD 雨水 秋春

「くははっ、追い付くってエリオの魔導師ランクは平均的に見てC以上は行uksi魔力変換資質の電気も持ってる。既に追い抜いてるって」

「え？え？」

あれ？魔力変換資質の事言いましたっけ？

「いやーまー、追いついて言っても分野が違つからなー。エリオは戦線部隊になると思うよ？向いてるし、近代ベルカって事は騎士になるんでしょ？」

「な、なんで、しってるの?!」

「アハハッ！俺はエリオより複雑なロストロギア相手に鑑定師をしてるんだぜ？大体分かるって」

やっぱり秋兄さんは凄い

僕の将来の目標には十分な人だ

「ん、意外と美味かったな。此処のケーキ、キャロに持って帰るか」

あれから話し込んでしまつて夕方になつてしまった

「フェイトさんにも買って行つた方が良いでしょうか？」

「あーそりゃーもちろん。代金は持つてやるからフェイトさんの好

きそうなのを選びな」

「ありがとうございます！」

フェイトさんは忙しく僕の住む保護施設に来れる時間を作るのを精一杯、それは分かっていたけど僕は遅くまで起きて持っていた

「エリオ！」

「フェイトさん！」

面会時間はとくに過ぎていた、だけどフェイトさんはやってきてくれた

僕はそれが嬉しくて今日の話元気良く語った

「雨水さんには今度お礼を言わなきゃね」

「はい！」

「あ、ケーキ。ありがとね、エリオの選んでくれたの美味しかったよ」

「あ、い、いえ」

いま思っただけどフェイトさんと秋兄さんは何処か似ている

フェイトさんは包み込むように優しく凍った心を暖かく溶かしてくれる

秋兄さんは荒々しくてちょっと乱暴だけど優しく飲み込むように全てを受け入れてくれる

どちらも優しい、信じられない程に優しい、勿体無いほどに優しい

「フェイトさん」

「なに？」

「僕、魔道師テストをつけてみます」

だから僕もそんな二人みたいな人になる為に魔導師になりたい

十二話 side エリオ (後書き)

| | | | | |
|--------|----|-----------|----|-------|
| 現段階の役職 | 本職 | ロストロギア鑑定士 | 副職 | アルバイト |
| 講師 | | | | |

十三話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオに相談を受けた あれ？俺ってこんな子供により弱いのか
何故か目標にされる ケーキ食う 意外にも美味しかったからお土産に持って帰る キャロ、ケーキ気に入った・・・でもカロリーを気にしてたっばい 終わり

ああ、何気に既に入局二年くらいか？

今日の仕事は第四陸士訓練校で特別講師を頼まれた

「えー・・・第四陸士訓練校の生徒の皆さん。今日は少しの時間ですがお願いします」

あー面倒だ

広さは一般学校の体育館くらいだろう

生徒達は直立不動、疲れないのだろうか

「魔力と言うのは確かに多ければ多い方が良いです。がしかし術式の改良等で同量の魔力である程度魔法の強弱を付ける事が出来ます・・・なので魔力量が少なくとも強大な魔力持ちに完全に太刀打ち出来ない訳では無いです」

表示されるのはミッドチルダ式の魔法陣。最近は近代ベルカと言った新しい形態が出始めカートリッジシステムも確立されてきた頃で魔法技術の進歩は目覚しい

ちなみに俺の魔法形態はミッド式・・・なんだけど使えるのはせいぜい初歩的なのを数個

これでも訓練は人並みにしてるんだけどなー

「飛行魔法に必要なのはイメージです。魔力を通すのは部位ではなく体全体です、放出系の魔法に分類されるので飛行中は常に魔力を消費します。しかし覚えればそれは確実に戦闘の際には有利になります」

浮遊だけなら大したモノではないが飛行となると違ってくる

飛行の代わりに別の魔法を代用してくる魔導師も居るらしい。でもそれは大概はレアスキルや先天技術

「と言ったように基本的な魔法とはインテリジェントデバイスが頑張れば自動詠唱出来るレベルです、魔力消費も少なく威力も当然低いです・・・ですがこう言った基本こそ応用の幅が広く使えます・・・ん？あ、そろそろ時間でした。では今から質問の時間に移りますね」

にしてもこんな弱そうな人間が偉そうに語ってると思うと笑えるな
ーとか考えていると物凄くイライラしてますと表情で分かる生徒が
突っ掛かってきた

「先生の魔力ランクをお尋ねしても？」

「ん？Dくらいだったか、たぶんそんなくらい」

予想外の低さだったらしく少しざわつきが入る

んー先にある程度の情報を渡してくれれば良かったのになー

「Dって・・・って何でそんな低ランクが、と言うかDって魔導師
として成立するの？よくテスト受かったわね」

仕事仕事我慢我慢

「あん？んだと？おい、魔力ランクが魔導師局員としてのレベルを
決めるものじゃないって知ってるか？」

・・・あれ？我慢するつもりだったんだけど

よし！流れに任せて進もう！

「それは教わりましたが限度があります」

「ほほお？限度ねえ、ならお前は俺より強いのか？」

「ええ」

「表に出ろ！」

「ええ！！」

・・・周りの視線が少しだけ痛かった

目の前に立ったのはオレンジ髪の少女だった、訓練生にしては珍しく自作デバイス

俺達は勢いそのままにリアルに表の訓練場に出た

周りの教師が何も言わないところを見ると周りも俺の力を見たかったらしい

「名前を聞こうか？」

「ティアナ・ランスターです」

「先手は譲ろうかな」

「そうですかっ！」

開始の合図になると銃型のデバイスの先が向けられシューターが発射される

三発 誘導弾 二発は前から挟み込むように来る圏で一発を背後からの本命

観察眼の情報を整理し動きを読む

来る場所さえ分かっていたら速かるうが遅かるうが一緒だ

それに誘導弾は速さを追及した弾では無い為、感覚的にはドツチボ
ールハード版

「っとギリギリッ！」

身体能力の高く無い俺としてはかわすのさえ難しい現実的に考えて
かわせる限界は四発くらい・・・あれ？挑発しといてただけど、
ヤベエ〜

十三話 side 雨水 (後書き)

少しティアナにしては冷静な判断に欠ける行動と思われたかも知れませんがこれには事情がありまして・・・

当初スバルが元気良く勝負を申し込む設定だったのですが戦闘機人に勝てる要素が無い！と気付き急遽身体能力平均並みのティアナに白羽の矢が立った訳です、はい

なので少し違和感があるかもですがご了承を

十四話 side ティアナ

最近の私は少し人間関係が面倒で疲れていたのか何時もなら冷静に流せるはずの事を受け止め無駄に起こってしまった

なんでこんな事に

私は割と手加減せずに特別にやってきた噂の講師にシューターを放っている

「アブナッ！」

講師の方は私の攻撃の位置を何かで先読みしているような動きを見せる

そのせいで段々と私も熱が入る

先読みされているなら全方位射撃で・・・

「うし！いまだ！」

私が同時射撃の為にタメに入った瞬間私に向かって走ってくる

行動の先読みじゃなくて思考の先読み？

考えないと・・・ああ、もう、観客が鬱陶しい

「マルチタスク。あーなるほど思考の先読みと分かったから思考を分割したのか」

歓心したような声を出した。次の瞬間、単発の威力の低いシューターが連続で地面撃ち土煙を発生させられた

目暗まし？

私は標的をズラす為に幻影シルエットを使う

「シルエットかあー、つくづく訓練生にしては実践に慣れてるなー。いや、実戦を常に想定していたのか？」

なんだかこの講師の言い方は私を見透かしているようでイライラする

「発見」

気付かなくなった。講師の人が行き成り目の前に現れデバイスを持っている方の手を捻り上げられる

「痛っ、痛たたっ！痛いです！」

「あははっ！ごめんねー、俺ってバインドまだ未完成でさー」

バインドが未完成ってどんだけ魔法下手なのよ！

魔法無し之力では流石に男の講師には勝てない・・・まさか魔法外の手を使ってくるなんて

「うん！魔法戦って言ってないし良つか！」

「痛い！痛い！いい加減放しなさいって！」

「優等生っぽい顔して酷い言葉使いな」

段々と手の疲れ力が抜けてデバイスを落としてしまう

講師の方は私のデバイスを拾って少し観察するように見詰める

「高そうなパーツだなあ」

「返して！かえ、痛たたッ！！」

取り替えそうと振り返ろうとしたら余計に腕が捻り痛かった

「射撃と幻影かー、なんて言うかセンターガードに最適な人材だな」

「褒めてます？」

「あれだな、キミみたいに可愛い子をこんな風に捕まえてると俺が変態みたいだー」

「放さないと叫びます」

パツと放した

瞬間的に魔力弾の形成も考えたが集中力が散漫になっているせいで上手く出来ない

「さて、俺の実力はこの程度だ。そもそも俺は卓上で教えるのであってこういった実戦訓練は苦手なんだよ」

勝っておいてそれはムカつく

私より断然に魔法が不得意なのにこれだから才能持ちは……
レアスキル

「いーなー才能持ちはっ。俺も魔法使いてー！」

「え？」

「ん？どした？」

この後、すぐに訓練校の教師が割り込んできたので話す事が出来なかった

訓練校から寮まで帰り、最近やたら付き纏ってくるスバル・ナカジマと一緒に帰っている

「どうしたの？今日はティアらしくなかったけど」

このスバルとは名前で呼ぶくらいには仲良くなっている。二人とも訓練校では珍しい自作デバイスだったので自然と仲良くなったんだと思う

「そうでもないわよっ、だってDランクとか可笑しくない？」

「ま、まあそれは私も思ったけど」

「それにあの講師の人の動き。ちょっと変だったのよ」

行動の先読みでも思考の先読みでもなかった

でも最初から攻撃の来る場所が分かっているかわせる最善の歩数や体制でかわす

いったいどんなレアスキルなんだろうか

「変って失礼だな」

「って！講師の人！」

「なんでこんな所に」

此処って一応女子寮行き道なんだけど・・・警備員を呼んだ方が
良いのかな？

十四話 side ティアナ（後書き）

今回のティアナの敗因は

威力とコントロール重視でシューターの数を減らした事

訓練所が屋外で土煙が発生しやすかった事

拘束された時にシューターから意識を外した事

の計三つくらいかな？とか思っています

どれも次の機会には克服されてそうで雨水の勝ちがギリギリだった
と言っのを分かってもらえたかなと思います

十五話 side 雨水

前回のあらすじ

第四陸士訓練校 それっぽい話を 少女に絡まられる 騙し騙し勝つ その後社交辞令的に訓練校教師と話して帰る 道に迷う 見知った少女発見 自分の話と気付く 話し掛ける 警備員を呼ばれかけた

「ってな訳で道を教えてくれない？」

「。。。。」

何故か微妙な表情で見られた

「何であの道を迷うんですか」

今日絡んできた方の少女が呆れたように息を吐きながら言う

隣の子は一応フォローっぽい事を言っているがイマイチフォローとは思えない

「仕方ないだろ？そいや、俺が変わって何処が？」

「私の射撃魔法をかわしていた時ですよ。行動や思考の先読みにしては動きは遅く、かと言って魔法が放たれている場所は分かっているようにかわす・・・変ですよ、咄嗟に判断したとでも？」

「んー、本当に凄いね、将来は執務官とか希望してるの？」

あの役職は無駄に高いスキルを要求されるからなー

フエイトさんも抜けた性格だけど仕事ではかなり優秀でエリートだったし

「希望しますが何か？」

「合ってるなって。えーっとティアナ生徒だったな、そっちは？」

何だか聞いてはいけない感じだったので、すかさず隣の子に話題を振る

「え？え？スバル・ナカジマです！」

「スバル生徒な」

元気そうだなー・・・と言うかこの子も自作デバイスか。流行ってるのか？

やだなー

自作デバイスって自分で色々魔法組んでる子が多いからメンドクサ
イんだよなマニュアル道理に出来なくて

「雨水先生でしたよね？」

「そそ、でどうしても良いけど帰り道どっち？」

「あっちですよ」

今来た道を指された

全くの逆を歩いていたのか、途中に地図等が無いから全然分からな
かった

「ん、ありがとう」

「いえ」

「じゃ、今度局であつたら声掛けてなティアナ生徒にスバル生徒」

「だうあー」

「あれえ〜？雨水さん帰ってたんですね」

「まあーなあー」

自宅でゆったりと疲れを取っているとキャラロが帰宅する

キャラロはピシっとした局服を着込んでいて肩からショルダーバックを下げていた

どっかのOLみたいだ

「老けたな」

「・・・フリード」

プロテクションを張ってみたがアツサリと破られ丸焼けにされた

そしてフリードは慣れた仕草でグタつとなった俺を俺の部屋に放って着替えると言いたげに鳴いた

「あいあい、お前が焼くから服がどんどん無くなるっの」

「キュック」

「まあな、確かに命令してるのはキャラロだし文句ならキャラロかー」

「キユウウ」

「ああ、少し恐いな」

早々と着替えてリビングに戻ると既にキャラは私服に着替えてソファに座っていた

「雨水さん、そうだんがあります」

「相談？」

俺はキャラの目の前に正座する・・・あれ？普通逆じゃね？

真面目な話だと自然と正座で聞こうとする辺りは教育の賜物と言っ奴なのだろうか

「うん、私、自然保護隊にいきこうかと思うんです」

「ふーん、いつてらっしゃい」

「・・・フリード」

何故に?!..!

「待て待て！キャロ！話合おう！」

「・・・ですね。そうだんと言うのは、その、あの、雨水さんもいつしよに、つい」

「え？なんて？」

「その、一緒についてきて・・・くれないかな？って」

「は？やだよメンドイ」

いまの部署気に入ってるし移動願い出すの面倒だし、何より俺はそこまで自然大好き人間ではないので保護と言われても他人事にしか思えない

「い、いいじゃないですか。恩もありますし返しましょうよ」

「まあ確かに恩返しは大切だよな・・・ん？フェイトさんには言っただか？」

「まだです」

そう言うのは保護責任者のフェイトさんに真つ先に言っべきだと思っただが何で俺を最初に選んだのか

まだフェイトさんとは少し距離があるのかな？

「なら話は今度だな」

「・・・はい」

とは言ってもあのフェイトさんの事だ、キャロの意見を尊重してOKを出すんだろっな

・・・事前準備をしておくべきか

十五話 side 雨水 (後書き)

今更気づいたが原作よりキャラ口が確りしてきている気が・・・雨水
(反面教師)が居るせいかな？

十六話 side キヤロ

自然保護隊。名の通り自然を保護し動植物を密猟者等から守る部隊、極地への派遣もあり人気の少ない部隊だけど私は大好き

数日前に雨水さんに一緒に行ってもらえないか相談を持ち掛けたけどアツサリ断られた

・・・むう

「キヤロの好きなようにすれば良いんじゃないかな？」

「フェイトさん」

「雨水さんも口では文句は言うかもだけどきつとキヤロの事を考えてくれるよ」

フェイトさんに相談してみると、とても心強い言葉を頂いた

「でも雨水さんをむりやり連れていくのは・・・」

「雨水さんを自発的に行かせる方法・・・んー私も雨水さんの事は鑑定師と講師をしている事くらいしか知らないもんなあ、なのはなら如何するかな？」

「なのは、さん？」

「あ、私の友達なんだけどね？説得するのがとても上手なんだ」

それは凄い特技ですね

あのダラけた雨水さんにも効果あるんでしょうか

「あの！その人に雨水さんの説得を頼めませんか？！」

「ん、んー大丈夫かな？確か来週くらいになのは休みがあるって言うってたし」

「よろしくお願いします！」

私が頭を下げるとフェイトさんは困ったように微笑んで分かったと一言返してくれた

一週間後、私は雨水さんの休みを高町なのはさんの休みと合わせてもらってこの間の雨水さんが買ってきてくれた美味しいケーキのあるミッドの喫茶店で合流するように取り付けてもらった

「始めまして」

「始めまして高町一尉、武勇伝は私の部署にまで轟いていますよ」

「恥ずかしいです」

「どうやら名前くらいは雨水さんも知っていたようです」

「いつにも増して表現が硬いのは一応上官だしな〜とか考えているに
違いない」

「フェイトさんは久しぶりですね」

「あ、うん」

「今日は何か話だそうですが、キャラが何時もご迷惑をすみません
ね。お二人とも忙しいでしょうに」

「全然！全然そんな事ないよ！キャラの役に立てて私嬉しいもん！」

「にやはは、私も今日は暇だったから問題ないよ」

雨水さんはフェイトさんを見て高町さんを見たあとに礼儀正しく上官に対する態度を取ったあとに少し失礼と言って私を二人の見えない所に連れ出した

「あれは何だ」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官。私の保護責任者でやさしいお姉さんじゃないですか」

「問題はそつちじゃねえ！あの砲撃魔の事を言ってるんだ！もしかして今日会わせたい人ってあの人か？！」

砲撃魔って女性に失礼ですよ、雨水さん

「そうです」

「ッ！キャロおー、別に俺は高町一尉が嫌いと言う訳では無いんだが余りあの人とは関わりたくないんだよ」

「え？なんでですか？」

「噂は尾ひれがつき易いもんだけどそれでも、あの高町一尉の噂は他の二人を群抜く」

それから雨水さんは前に生徒から聞いた話を教えてくれた

何でも、高町さんと本局部隊のデモンストレーションの様な模擬戦があつたらしいのだが、そこで高町さんは一人で本局屈指のエリート部隊を圧倒しその場で生徒までも撒きこみ無双したそうだ

「ま、まさかあ」

高町さんは話では砲撃型、砲撃型はチャージに時間が掛かったりと強力な前衛が居て初めて役に立つポジション。そんな一人で無双だなんて

「ああ、俺も尾ひれが付いたんだとは思ってたが・・・その、あの人の魔法センスが異常なのは何と無く分かるんだよ」

「と、ともあれ！早くもどりますよ！お二人ともまってますし！」

「やだなー、マジなんで俺なんか・・・ヒューズうー、今こそお前の出番だろお？」

何故噂だけで此処まで恐がっているのかは不思議でしたけど呼んでおいて帰る訳にもいかず雨水さんは渋々戻った

しかし高町さんに笑顔を向けられた時は凄い苦笑いになってたけど

十六話〜side キャロ〜(後書き)

満を期して管理局の白い悪魔こと高町なのは登場です！

コミックでのなのはさんの戦いを見てるともう常識なにそれ美味しいの？状態ですよ

十七話 side 雨水

前回のあらすじ

帰宅 キャロに明日は会って欲しい人が居るから時間を空けてくれ
と言われる 何故前日にと思ったが仕方ない 喫茶店で会うらしい
フェイトさん発見・・・高町なのは一等空尉殿？ つい咄嗟に観
察眼で見えてしまい理不尽なくらいな才能を見る キャロに問い詰め
ると兎にも角にも話を でテーブルに座ったが何故か好意的な目で
にこにこと笑顔を向けられる どうしよ・・・お話と称して砲撃を
放つと言われている人間とよりによってお話とは・・・

「え、えーとそれで誰が俺に用なのかな？」

「私だよっ」

高町なのは様々！！！！白い悪魔と恐れられた砲撃魔が話し相手か
よおおおおお！

「なに？文句ある？」

「何も無いです！イエッサー！」

「そう、あのね。一回前にキャロちゃんから聞いてると思うけどキ
ャロちゃんの為に一緒に自然保護隊に行ってくれないかな？」

きゃ、キャロの奴。まさか高町一尉に協力を求めるとは卑劣なッ！あれか、フリードの炎で焼くのに飽きたから砲撃で来たか。んー詰んだな

「拒否権はあるんですかね？」

「・・・無い、なの」

無い?!しかもなのとかちよつと子供っぽくて可愛いなあーとか普段は思えるかもだけと・・・

目が恐い!何より胸元でキラッキラン言ってるデバイスが恐い!

脅迫だ。説得が駄目なら脅迫なんてまさに悪魔だ。と言っか初対面の人間に脅しを掛けてくるとは

「何だかさつきから雨水さんの視線がとても失礼な気がする」

「べ、別に何も・・・綺麗だなーとか？」

「にゃははーそれは嬉しいなっ」

「・・・雨水さん」

俺は褒め言葉を送ったはずなのに何故かフェイトさんとキャロから
非難の目で見られた

結果だけ言っと結局俺も一緒に行く事になった

何故か既に異動願い等も提出された事になっており局としての準備
は終わったあとだった

「つたく、面倒な」

「めいわいくでした？」

ミッドの次元転移ポートの様な所で適当に昼食を取りながら愚痴を
零す

「迷惑かもなーとか思うなら巻き込むなよな」

「だって雨水さんと一緒がよかったですし」

「まー俺も機会があれば自然保護隊の皆にはお礼くらいしないといっ
て思ってたからこれで良かったのかも知れんがな」

とは言え俺達が自然保護隊に居るのは約一年くらいになると思う

理由は俺の講師休暇期間がそれくらいと言っただけ

「良かったんですよ。これで」

「ふーん」

昼食を終えるとすぐに手続きを済ませて転移する。するとすぐに向かえの人が来てくれた

しかもご丁寧の前に俺達をミッドまで案内してくれた、おっちゃんだった

「おー！久しぶりだな。お前等、少し背伸びたか？」

「伸びたよ、成長期は過ぎたがまだまだ成長する年頃だからな」

「私も少しだけ」

「そうかそうか！キャンプで皆が待ってるし、さっさと行くぞ！」

排気ガスを気にしてんのか車では無く徒歩……ん？ミッドの車は電気自動車じゃなかったか？

んあ……単に道が確りしてないからか

「にしても俺等は前回料理しか、してなかったから何気に自然保護の仕事とか知らないんだよな」

「そうだなあ、主に保護指定の動物を守ったり金になりそうな動物を捕まえに来た奴を逆に捕まえたりお前等みたいに偶然迷い込む奴をキチンと出口まで案内したり・・・偶に遺跡とかに見付ける奴も居るそうだが」

ホント動物愛護団体みたいな活動だな

俺の特典スキルだと天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。(長いので統率力と呼称)か全ての事象を観測する者。(表現し難いのでそれっぽく仮完全記憶能力と呼称)が役に立ちそうだな

「確かにこんな森ばかりの未開地なら遺跡くらい発見出来そうだな」

「ハハツ！この辺は既に調査済みだ！」

夢を壊しに掛かるなよ

十七話 side 雨水 (後書き)

レイジングハートさんが無言で圧力を掛ける。でした

十八話 side 雨水

前回のあらすじ

女性陣三人の策略により森ばかりの場所に 運が良いのか意図的なのか前回と同じ保護隊に 遺跡発掘とかロマンあるなとか思ったら おっちゃんはそのロマンを壊す チクシヨウ 合流・・・久々会 うとやっぱり皆気さくで良い人達だなー

「なあキャラ、前回とどう違うんだ？」

「料理のとうばんは新人のつとめです」

「部活みたいだな」

「ぶかつ？」

ん、そうかキャラは特に学校とかは通った事はなかったな。村で最低限の常識を教えてもらっただけらしいし

・・・キャラの学力が不安になってきた

「集団で集まって好きな事をするグループみたいなのかな」

「たのしそうすね」

「だな」

今日の献立はキャロが好きなおムレツがメイン。だが十数人分となると結構辛い、多人数向けだとやっぱりカレーとかシチューとかが楽なんだけど

「卵料理が好きって俺の思うに子供っぽいと」

「そ、そうですか?!・・・こども、ですか」

「ま、俺の勝手な先入観って奴だから世間は・・・さあ?って感じだがな」

卵自体は栄養があると思うから別に好きで構わないんだろうけど・・・あるよね? 栄養

「そう言えば雨水さんの好きな食べものってなんですか?」

「あん? んーハンバーガーかな?」

「十分こどもですね!」

「何故嬉しそうに言う」

そろそろ高校生って称号も消えたなー(年齢的に)

大人になっても子供の心は忘れずに！の精神で行けば問題は無いか

「あ、やべっ焦げた」

「なにしてるんですかッ?!」

「大丈夫だ、これはキャ・・・おっちゃんのにしよう。あの人ならこの程度は気にせず食べるはず」

「雨水さんのです」

「いっ其他のも焦がしてやるっか」

「止めてくださいね。なんか黒いですよ、雨水さん」

「チッ」

「せめておっちゃんだけでも」

「この後、おっちゃんのを焦がす事に成功したのだがキャロに目撃されていてフリードにより完全に真っ黒にされた炭みたいなおムライスを食わされた」

「そいや焦げって癌細胞って聞いたけど大丈夫なのかな？」

「はいはい、此処は保護区域なので生息動物への餌やりは止めて下さいねー」

「え、あ、すみません」

「いえ、では観光を楽しんで下さい」

まずは危険の無い観光許可地区の見回りから任された

午前中はキャロと別れて見回るが午後は合流する予定だ

にしても一つの丸々未開世界って言葉通り次元が違うよなー、登録名は第何十何世界とかだったけど・・・覚えてない！興味ない事は覚えなない！

「お仕事ご苦労様です。良い天気ですね」

「ええ、家族旅行ですか？」

「そうなんですよ」

どうやら此処一帯は割と人気のスポットらしい

何が人気なのかサツパリだけど・・・マイナスイオン？

「あ、あの！お兄さん！」

「ん？なんだ？坊主」

なにやら慌てた子供が話し掛けてきた・・・面倒ごとかッ

「あつちに怪我した動物が！」

「分かった、知らせてくれてありがとうがとな！」

「うん！」

頑張つてと応援の言葉を背に知らされた場所に行くと狼寄りの白い毛色の子犬が怪我して倒れていた

すぐに観察眼のスイッチを入れる

絶滅指定 魔狼 魔力ランクC 重症 治療優先

犬に負けた・・・だと？あ、狼か

正確には魔力ランクと魔導師ランクは別物だけど似たり寄ったりなものには違いない

「この場合は治療と報告だよな」

ホントに必要な情報を取り出せる観察眼はとても便利だ

一応動物を守る仕事なので動物用の医療キットは持ち歩いている。
それと観察眼を併用して応急処置を済ませ保護隊に一報入れてキャンプに戻った

十八話 side 雨水 (後書き)

些細かも知れませんが惑星一つ丸々を数十人の部隊で可能なのかと言う謎
調査隊は別部隊として観光地区や一部危険地区に絞れば・・・もし
くは一定区域毎に拠点を設け複数の保護隊を配置すればイケる？な
んて考えてます

十九話 side 雨水

前回のあらすじ

新人は雑用！ 料理作成・・・あ、焦げた 勢いでおっちゃんのも焦がす キャロが発見 夕食の席で俺の目の前に二つの炭が キャロが何かやり遂げたみたいな爽やか おっちゃんからも笑顔を送られる 決心して試食 まあ予想通りの味 数日、保護隊の雰囲気にも慣れた所で危険の少ない場所に たまに遭遇する家族等と世間話 怪我した子魔狼を拾い放置は不味いので持って帰った

「危険地区の動物だな」

「へえー」

「群れから逸れたか捨てられたか」

どちらにしても一時的に保護する事に変わりは無いそうだ

少し様子を見てみるとキャロは帰ってきた

「雨水さん！保護をしたどうぶつは大丈夫でしたか？！」

「いまは寝てる。魔法って便利だな！」

おっちゃんは治癒魔法を使えた

観察眼で見ていたが確かに傷は治っていったし本当に魔法とはビックリだ、俺も早く使えてえなあー

「かわいいい」

「キュツ?!」

フリードがボソツと言ったキャロの言葉に過剰反応した

俺はフリードの口の端から火が漏れていたなんて見てない。うん、幻覚に違い無い

「さて、一時的だが保護する事になった。以上」

「ほんとですか!やったあ!」

「やったあーって俺等はコイツの群れ探して面倒になる予定なんだがな」

生息地域が分かっているだけでも救いか

流石に分かってなかったら諦めるぞ、俺は・・・

「わたし頑張ります！」

「そうか！頑張ってくれるか！」

「・・・雨水さんも頑張りますよね？」

「もちろん！七時から一時、二時半から六時の間な！あと時々五分休憩！」

「きんむじかん？」

当然自然保護隊にそんな目安の勤務時間など通用しないのはおつちやん達を見ていて分かるのだがそれでも暗い森の中で狼の群れ探しなんてやりたくない

「名前は何にしようか」

「え？」

「名前だよ、名前、決めてないと色々不便だろ？」

「わ、わたしが決めてもいいですか！！」

「ポチで良いだろ」

犬っばいし

キャロの意見は・・・却下、任せると乙女チックになりそうだし

「ちょ！幾らなんでもポチはこの子がかわいそうです！もっとちゃんと考えてあげないと！」

「名前なんて分かりやすさが一番なの、無駄に変な名前になるよりメジャーなのが一番だ」

「そんな事ありません！」

「はあーなら保護隊の皆に多数決で決めてもらうか」

「望むところです！」

結果・・・俺、惨敗

理由として幾つかあったがその一つ

「お前、犬じゃないんだからポチは無いだろっ」

と男性陣から言われ女性陣からはキャロを軽くうつうつる状態にさせた事を数人に渡り交代で説教された

「シロ！フリード！おいで！」

「ガウ！」

「キユクー！」

魔狼の名前は正式にシロと決定

「……ってキャラオ！昨日も言ったがシロって発想的に俺のポチと大差ないだろ！」

あれだけ保護隊女性陣に説教された結果がこれとは俺が報われない

「大差あります！ポチだとなんか、ああ、犬だなあ、って思いますけどシロだとちゃんとこの子って区別が付きます！」

「フリードも白いじゃん！」

「フリードはアルザスの龍です！」

訳の分からない言い分に混乱しそうになるが結局の所、どうせ群れが発見できればそれでお別れだろうし、ポチって名前に深いこだわりがあった訳じゃない

割り切ろう。うん、美少女類のキャラが笑顔なんだしそれで良いじゃない？って感じで

「雨水さん！シロはもう大丈夫なんですか？！」

「んーまあー外で歩く程度には大丈夫でしょ完全回復には一週間は欲しいけどね」

「わたしが面倒をみます！」

「ん、頑張れよ」

それから一応治ったシロの躰は俺に任された

んーこう言うのは保護するのを喜んだキャラがするべきじゃ・・・
キャラが躰をする性格に向いてないのは分かるけどね

甘いし優しいし可愛いし

飴がキャラで鞭が俺か・・・側からみたら良いコンビか？

「まったく、一応群れに帰るまでとは言えキャンプに居る以上はそれなりにキチンとしろよ」

「ガウツ！」

講師の才。他人への教えがとても上手いスキル・・・てつきり人間限定だと思っていたのだがシロの言葉の理解や特技の取得のスピードが幾ら頭の良い魔狼とは言え異常だったので恐らく動物にも作用しているのは無いかと推測

これは思わぬ収穫だったな

十九話 side 雨水 (後書き)

今回の魔狼の名前ですが最初はもっと長いのを考えてましたがチエツクする内に子供が考えた名前じゃないなと気づき見た目からのシロと言つ名前になりました

二十話 side キャロ

「雨水さん。何かこのじょうきょうに見覚えがあるのはわたしだけですか？」

雨水さんは苦笑いでシロと目の前の黒い獣を見比べてやれやれと言った仕草をする

「この狼の名前に魔法の魔が付いているのを忘れていた」

「で、ですよね」

腕の中にシロ、肩にフリードを乗せて私は今すぐにキャンプに戻る準備をする

あーそれにしても本当に見覚えがあるなー

特に涎を垂らされて見下ろされてる具合が

「えっと、確かに魔狼であってるな。にしても何でさー・・・何で子犬サイズから前回の竜種並になるとは」

「シロちゃんも将来あんなに大きくなるんですね」

「さて、ゴホン」

咳払いをした雨水さんは大きく片手を前に突き出して宣言した

「聞け！アホ犬共！」

「ガアアア！！」

「まあそう怒るな、馬鹿犬。こつちが折角テメエらの連れを持ってきてやったんだ。喜べ」

「ガウツ！」

何だか歓迎の様子が一切見えない

まあそれは幾ら言葉が通じないにしても馬鹿にされているくらいは何と無くで把握できるだろうし多少なりはもしかしたら言葉を理解しているのかも知れない

「あん？自分達から捨てた？・・・ふふつまあ何と無く予想は付いてたさ・・・だから俺はお前等を罵倒した訳だが」

自分達から捨てた？私と似てる

それで雨水さんは怒ってくれている？

「このまま俺達はこの・・・俺等はシロと呼んでいるが、このシロを連れ帰っても問題は無い」

「ガウツ」

「ああ、帰る帰る。だからって折角俺等が苦勞して見つけたお前等だ、せめて捨てる事についてお前等がシロに謝って貰いそれで帰ろう」

「ガアツ!!」

巨体の黒い狼に囲まれている状況で更にその狼が怒り出した

私は震えを我慢するので精一杯なのに雨水さんは堂々としている

「おっと！此処で俺等に手を出せば状況不利になるのはお前等だけ？」

「ガ」

「お前等、俺の職業を忘れた訳じゃあないよな？俺の職は自然保護、それは危険から動物を保護すると同時に人間に危害を加える危険な動物を駆除指定出来るって訳だ」

え？そんな権限ありましたっけ？

雨水さんは空間モニターを宙に表示させる、そこにはイエスとノーと書かれた何かの最終決定のような画面が表示されていた

「確かにお前等だったら此処で俺等を殺すのは容易いだ。がしかしその後はどうだろうなあー、最初らへんは派遣部隊も少数だから問題なくても五度目くらいにはお前等でも対処出来ない数だぜ？さあどうする？此処でプライド押し折って謝れば丸く収まるんだぜ！」

か、格好良い

雨水さんが輝いている

「グルルウ」

「ガウツ」

「ガウウ」

それぞれで会議でもしているのか一箇所に纏まり話し合いをしている、雨水さんと言うと魔狼の群れの更に奥をジーツと見つめている、睨むに近いかな？

「決まったか！馬鹿犬共！」

黒い狼は雨水さんの前に集まって頭を下げる

「コッグルウ」「」

「アハハハツ！俺にじゃねえだろお！シロにだろ！？ハハハツ！誇り高き魔狼が良い感じだな！」

あれ？雨水さんが壊れ・・・

黒い狼の皆さんも若干怒っているような雰囲気が出ている

「コッグルウ」「」

「ガーウツ！」

シロは小さな手で黒い狼の頭を叩いた

「さて！帰るぞ！」

「も、もう大丈夫なんですか？雨水さん」

「大丈夫だ。アイツらはどうやら長以外は馬鹿だ！この奥っばいから逃げよう！マジ早く帰ろう！」

あ、そう言う事ですか

キャンプに戻ると雨水さんは疲れたように椅子に座る、そしてダル
いと一言呟いて空を見詰めた

「まったく最悪だな」

「ですね」

「どつちやらそいつはアイツらの頂点の娘らしいぞ」

へえー・・・へ？

「うん、正確には今の長の息子の腹違いの妹って位置だな。毛並み
が白なのもそのせいだ。魔狼の長は代々白いらしい。んとキャラに
はちよつと難しい話だがよつは後継者争いだな」

「え？え？！じゃ、シロってとっても凄いッ？！..」

ってそんな事より娘って事は女の子だったんですか？！いままで男
の子と勘違いしてました

「うん、まあ将来は魔導師で言う所のB+からA-くらいは望めるな」

「ガウ！」

「お！誇らしげだな」

「キョクルー！」

「お前が絡む意味が分からん」

そんな凄い狼と分かってなお、前と変わらず接する雨水さんはやっぱり凄い人なんだなあーって私は思います

・・・啖呵切ってる雨水さんは格好良かったな

二十話 side キャロ (後書き)

雨水がキャロには難しいと言った内容。

魔狼の長は代々オスが担っていた、そしてそれに合わせるように毛並みが白で生まれてくるのは必ずオス、しかし今回何故かメスで白い毛並みが生まれてしまい一族から追い出される事になる。それがシロ。

二十一話 side 雨水

前回のあらすじ

森を二時間くらい搜索すると意外とすぐに発見 理由、デカかったから 人語が理解出来るならと嘘八百の大立ち回り 意外と正直モノなのかアツサリ信じる しかし観察眼が奥に居るであろう奴を捉え引き返す事に決定 どうにか謝罪までこじ付けあとはトンズラ シロは正式に自然保護隊のペットになった

「と言う事があった」

今日は珍しく自然保護隊。と言うか俺とキャロにお客さんが来ていた

165

「それは・・・ご苦労さま?」

「ああ、苦労したんだよ。エリオ」

そう客とはエリオ。中継ポートまで着いてきた過保護な保護者のフイトさんは俺にエリオを預けるなり全速力で仕事に向かっていったなんでも急な事件が入っているだとか、それにしてもミッドから此処までの道のりは割と子供でも大丈夫なんだが観光地区もあるような世界だし

「エリオ君！来てたんだ！」

「あ、ルシエさん。久しぶり」

「キャラで良いよ、同い年くらいだとおもっし」

聞いた話ではエリオも局入りしたらしい

まあ仕事自体はしてないから見習いみたいなもんだけど、扱いとしては執務官補佐

・・・あれ？また俺より上の人だ

「「どうしたんですか？」」

「ん？いやあゝ、世の中って不思議だなあーって」

「「？」」

「ガウツ！」

「わッ」

最近観光区のマスコットを張っているシロはエリオの勇猛果敢にアピールをしていた

ああ、そう言えば最近フリードがキャロの命令無しに俺に八つ当たりのように攻撃を仕掛けてくるようになったなー

解決せねば！

知り合いが来たと言う事でおっちゃんが早めの休みをくれた

ナイス！

「んーだが結局俺はこの観光地区に来るしかないんだよな」

他は危険地区だったり立ち入り禁止地区だったり嚴重保護地区だったり

此処くらいしかエリオ達とまわる場所はない

「空気がおいしいって言うんですよね！」

「ガウッ！」

「いや、それは自分で決めろよ。まあ緑も多いし美味しい？んじやないか？」

別にミッドも都市って割には自然公園も多いし空気が不味いって訳じゃないだろうけどよ

「自然が多くてけっこう人気なんだよ」

「キュクルー！」

自然が多いって言うか自然しかねえよ

現在の立ち位置

エリオ シロ（歩き） 俺 キャロ フリード（キャロの肩上）

フリード重そうだな、最近大きくなってきたし・・・成長期？

「シロって魔力持ちですけど、どちらかの使い魔ですか？」

「いや、シロは元々魔力持ちの生物なんだよ。だから知力も割と高い」

「へっ・・・秋兄さん、最近僕も魔法を習ってるんですけど見ても
らえますか？」

「あ！エリオ君ずるい！わたしも！」

ずるいってお前何時も一緒に居て言わなかったよな？

取り合えず見るにしても人が居る所は不味いので関係者以外は立ち入り禁止の保護地区の安全な所に移動し二人の様子を見る事にした

「セツトアップ！」

あれ？二人ともデバイス持ってるの？しかも支給品じゃなくて特注品だし

俺も一応デバイスは持つてるけど支給の杖で拳句にデバイスがいる程の魔法はまだ使えない

「ん？バリアジャケットは未設定か？」

「はい、まだ別に戦闘は想定してませんから」

「わたしも」

「わたしもってキャロ。お前は想定してないと駄目だろ」

「大丈夫ですっ！雨水さんが守ってくれますから！」

嫌な高望みだ

「ま、キャラの件はあとでじっくり話し合おう」

「むう」

「あ、あはは・・・」

二人とも人に見せるのは慣れてないのか少し緊張気味だが暫らくするとすぐに真剣な目になり大人の俺でも凄いなと思う程の集中力を見せ付けた

二十一話 side 雨水 (後書き)

シロが正式にフリードの立場を脅かし始めた回でした

二十二話 side キャロ

エリオ君の提案でエリオ君と雨水さんと私で魔法の練習をする事になった

「さて、まずはキャロからにするか」

私の特殊技能は竜使役。そして私はアルザスの竜召喚士としての技能である竜魂召喚を見せる事にした

雨水さんは離れた位置で座り易そうな石にエリオ君と一緒に座る

「蒼穹を走る白き閃光 我が翼となり天を」

・・・んーあれ？二人とも良い雰囲気じゃない？ちょっと羨ましい

「キャロ！ストップ！召喚するな！暴走するぞ！」

「え？」

何故か召喚前に暴走を予期され詠唱を中断された

「キャラ、集中だ。成功をイメージすれば良い・・・あと精神にぐらつきがある」

「凄い。そこまで分かるなんて、流石講師の仕事で引つ張り合いになるだけある」

「あれだな、いつそ人形でも抱きながらしてみたらどうだ？意外と多みたいだぞ？」

「ほんとですか？」

「ああ、召喚士は別に自分が戦う訳じゃないからな。手が空いてなくても問題ないって」

「なるほど、一理あります。それに雨水さんの言う事なら試してみる価値はあると思います」

「人形、持ってません？」

「持ってない」

「エリオ君は？」

「僕?! 持つてる訳ないよ!」

「だよな」

「ほら、代用」

「ガウツ」

雨水さんは隣のシロを持って私に渡す

シロの毛はふわふわで確かに人形を抱いているみたい

「蒼穹を走る白き閃光」

「お？意外と安定、人形を抱く事によつての精神安定は効果をきしたか」

「我が翼となり天を駆けよ こよ我が竜」

「最後だな、制御率八割。まあ成功ラインか」

「フリードリヒ！」

いつも小さい子竜のフリードが四角い魔法陣を通ると一匹の凜々しい竜と化した

それはアルザスの白き竜たるフリードの真の姿

「おー！二度目で成功！やっぱ子供は飲み込みがはや・・・」

嬉しそうにフリードに近付いてを頭を軽く叩いていた雨水さんの頭が丸々啜えられた

「……。」

なんて反応したら良いんだろう？……取り合えずフリードには吐いてもらおう

「フ、フリード？」

「グルッ」

放したフリードの口から出てきた雨水さんはフリードの涎塗れで震えている

「……フ、フフ」

「雨水さん？」

「フリードオオオオオ！」

私達二人は余りの雨水さんの大声にビクリと体が跳ね上がる

「よっしゃああ！大きいナリになったら行き成り飼い主様への反抗かゴラア！」

「え？え？飼い主はわたし」

「キャラ口は黙ってる！餌をやる者が飼い主って偉い奴は言った！」

・・・餌をあげているのもわたしです

「いいぜ！受けてやんよ！どうせ魔法で風船みたいにブクブクと肥大化させただけだ！恐るに足りず！」

「あの・・・キャラ口、さん」

「キャラ口でいいよ・・・なに？雨水さん以外についてなら何でもきいて」

「ごめん、なんでもない」

「うん」

フリードVS雨水さん

どう考えても竜種でしかも力解放状態のフリードが負ける要素は皆無だけど雨水さんも何だかんだでピンチを潜り抜けている

勝負は分からない

「フリードめ、こっちがお前の弱点を抱えているのを忘れてやがるな」

弱点？

流石雨水さん。幾ら暴走してないとは言え制御外のフリードと杖も無しに相対するなんて、普通なら自殺行為です

「ゲルウア！」

先制はフリード。巨体に似合わず大きく素早く動いて尻尾を面として使う、雨水さんはフリードに背を向け私達の方に全力で走り尻尾をかわす

更にフリードは翼を羽ばたかせて風をぶつける

「ダイナミック前転！」

雨水さんはその風に乗って前転したかと思うと丁度私の隣の位置を取る

フリードとの距離は離れてはいるもののフリードが羽ばたけば多分すぐに追い付ける距離

「キャロ」

はう！雨水さんが何時になく真剣な顔で・・・格好良い

と言うか何で私抱きかかえられてるんだろう？

「くはははは！フリード！もはや俺の勝ちだ！キャロがいればお前は手を出せまい！故に俺の完全勝利だ！降伏なら受け付けるぞ！」

・・・。

私は取り合えずしたり顔の雨水さんの顎を下からアッパー気味に打ち抜いた

二十二話 side キャロ (後書き)

フリードの行動はあくまで甘噛みやジャレ付き行為の延長です。敵対意思は無いですよ?・・・たぶん

二十三話 side エリオ

「エリオ・・・なんで俺は寝ていたんだろうか」

「えと、自業自得って奴だとおもいます」

「そうか」

どうやら秋兄さんは十数分前の出来事を全て忘れていているようです

ちなみにキャラ口は物凄く不機嫌になりながら雨水さんに悪戯をする
と帰っていきました

「え〜っと、あ〜・・・魔法を見る話だったな。キャラ口は？」

「先に帰ると」

「先に？はあー全く不真面目な奴だ」

なんだか秋兄さんの将来が不安になるのは僕だけでしょうか？

「ならエリオだけでも見てやるか」

「はい！おねがいします！」

再度セットアップして槍を構える

「とは言っても俺は武術に精通はしてないからなー、取り合えずはいま持つてる一番って思う魔法を使ってみて」

「はい！」

槍を水平に構え詠唱に入る

そして背後に生成した五基のフォトンスフィアから連続してフォトンランサーを放つ

これはフェイトさんに教えてもらった一番の魔法でいまの僕では途中でフォトンスフィアの制御不足で魔法が消えてしまう

「ん〜・・・弱いな、しかも未完だ。まあ近代とは言えベルカから遠距離は苦手な部分があるのかもだけど一発戦闘中にも使える大技が欲しいね」

「あ、あの」

「はい、どござ」

「僕はソニックムーブとか一気に相手に近づける魔法があるので無理に遠距離にこだわる必要はない・・・のかなーって」

フェイトさんから教えてもらった、このファランクスも試験の為に言う理由が大半を占める

僕の戦闘スタイルは接近戦でもハイスピードバトルですから詠唱の暇も無い

「一理ある。だけど俺が大技を持ってろってのには強くなる以外にも理由がある」

理由

それにしてもさっきまで秋兄さんと違って真剣な秋兄さんは何だか惹きつけられるような魅力がある

素直に付いて行きたいと思うし超えたいと思う

「それはな？脅しの役割だ」

「おどし?!」

「うん、脅し。幾ら犯罪者だからってバカスカ攻撃を許されてる訳じゃないし出来れば戦闘は避けたい。そこで大技見せて実力の差を分からせるって奴だ、これで三流事件は大体解決する」

非殺傷設定だからって人に向かって刃を向けていい口実にはならな

い、か。確かに言われてみればそうですね

「それに非殺傷設定ってあれで未完成な所があるからな！。非殺傷設定だから大丈夫だよって言う奴がいたら逃げる、いいな？」

「え？はい」

非殺傷設定が未完成？そんな話、局では聞いてない。と思う

「話逸れたな。そうだな、お前は魔力変換資質があるから将来に向けてその方面の技だな、AMFが通じない天候操作系の魔法で如何だろうか。見た目も派手で魔力消費も思いのほか少ない」

「つまり？」

「サンダーフォール。天候操作系遠距離魔法もしくは天候操作型儀式魔法、魔力変換資質の電気を媒介に雷雲を生み自然の雷を操作する魔法。ようは自然現象の再現だけど自然現象故に魔法無効果フィールドも突き抜ける魔法使い殺し殺しだな！ちよつと格好良いな魔法使い殺し殺し」

「語呂悪いですよ？」

「そうか？ま、いいや。で？どう思う？」

「儀式魔法ですか」

さっきも見せたように儀式魔法はちょっと苦手な分野なんですけど

「ま、完成まではある程度時間が掛かっても良いし威力を下げても詠唱や魔力消費を削ればお手軽必殺技くらいに下げれると思うよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん。それでも一年は掛かるだろうけどね」

一年。大技取得の期間としては短い方なのかな？

あ、そう言えば……

「秋兄さんって魔法に詳しいですけど、秋兄さんの一番の魔法ってなんですか？」

「……お前は俺にそれを聞くか」

え？え？

秋兄さんは露骨に落ち込むがすぐに持ち直して深く考え込む

「強いて言うなら俺の最大の魔法は言葉だな」

「言葉？」

「そ、俺は一般局員にも劣る魔法使いだからな。虚勢を張って言葉で打ち負かさないとやっていけない訳よ・・・だから機械だったり野生的だったり逝っちゃってる気味の犯罪者は手に負えん」

言葉。ある意味で誰も傷付かずに解決する一番の方法だと思う、虚勢を張るのだから自分を守る魔法も使えないのに危険に飛び込んでる訳だし

少なくとも誰もが簡単に出来る事じゃないと僕は思う

「・・・それにしても魔法使い殺し殺し・・・流行りそうなんだからなあー」

・・・流行らせたいんですか？僕は秋兄さんのネーミングセンスがよく分かりません

二十三話 side エリオ (後書き)

エリオの戦闘スタイルが少しフェイト寄りになり必殺技を覚えそうな感じですよ

二十四話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオが遊びに来た フェイトさんの過保護っぷりに少し呆れるでもあんな綺麗な女性が母親ならエリオも鼻が高いと思う 観光がてらに観光地区を巡る エリオが訓練の成果を見て欲しいと言い始めた 了承 何故か寝ていた 自業自得？昼寝でもしていたらしい キャロは帰ったそうで エリオに魔法のアドバイスを 帰る前に一応キャロがキャンプにいるか端末を開く するとエリオの悪戯して帰ったと言う言葉が頭を過ぎった

「キャロ〜！！なんだこれは！！」

「ガウ？」

「キユクウウ？」

キャロはエプロン姿で目をパチクリとしながら不思議そうに俺と端末画面を交互に見る、隣でシロやフリードもキャロの仕草を真似する

「すみません、質問のないようが理解しかねます」

「いやいや！お前だろ？！俺の端末のトップをお前の画像にしたのは！」

「だめですか？」

「駄目に決まってるだろうが！恥ずい！」

何のつもりだ。しかも自分で撮影したとは思えない程に自然なプロポーションじゃないか・・・可愛いな

「いやですか？」

「嫌では無いな！」

・・・あ

「ふふん。なら良いじゃないですかっ、雨水さんも料理当番なんですから手伝って下さい」

「・・・分かったよ」

「ところでエリオ君は？」

「・・・あ」

画像を見た瞬間、全速力で此処まで来たから置いてきた可能性が・・・うん、置いてきたな

「ひどいですよ、秋兄さん」

「ハハハ！坊主も大変だっただろうな！初めての場所で一人ぼっちなんて！」

「うぐっ！」

「フェイトさん怒るかもですね」

「キョクルウ」

「……旅に出る！」

そもそもキャロのせいだと物申したいが自然保護隊に味方はもう居ない

……もう？最初から居なかった気もするなあ

「俺はフェイトさんに打ち勝つ為に逃げる！」

「それを打ち勝つとは言わねえよ」

「だってあの人、子供関連で怒ったら絶対般若になるタイプだよ！」

確信持てるね。しかも権力財力実力どれを取っても勝てる要素は無い・・・つまり逃げるが勝ち！

むしろ逃げないは負け！

「っていま逃げてどうするんですか。フェイトさんが来るのは明日でエリオ君は今日は泊りだよ？」

「そうなの?!」

「なんでエリオが知らんねん」

「連絡があつたのはさっきだよ、エリオ君が知らないのもとうぜんです」

「・・・誰かの所に泊まるの始めてだな」

「あれ？お前って局の保護施設に居るんじゃない？なかつたっけ？既に誰かの場所じゃん」

明確に言つたら公共の場だから皆の場所か？

「「「「・・・」」」」

フリードとシロに噛みつかれた・・・ダブルだと?!

シャワーを浴びているとエリオが飛び込んできた

「キャロから逃げてきたか」

「分かります?」

「まあな、それ以外は自然保護の女性に誘われるくらいだからな危険は」

男の子を女性はやたら揉みくちやにするがあれは何なんだろうな?

良かれと思っているのだろうか

「服ずぶ濡れだぞ? パジャマはあるからもう脱いで入っていけよ。
一人用で狭いが子供のお前なら問題ないさ」

「い、いいんですか?」

「髪でも洗ってやるよ」

「ありがとうございます!」

第一回エリオ寝させる場所争奪戦がこの後繰り広げられ死闘ジャンケンの末に
俺が勝ち取った

・・・いらねえ

二十四話 side 雨水 (後書き)

原作設定を見返して気づきましたが原作ではまだ二人は出会ってないですね

二十五話 side エリオ

同じ布団で誰かと一緒に寝たのは何年ぶりだろう？

古い記憶にそんな感じの無い訳じゃないけど僕の記憶かは分からない

「眠れないか？」

「え？い、いいえ」

「返事が返ってくるって事は起きてて眠れてないんだな」

くすくすと小さな声で笑う秋兄さんは楽しそうでこの状況を自然に受け入れていた

秋兄さんが僕を本当の弟みたいに接してくれるから、僕もまるで本当に兄が出来たような気分になる

「そだ、さつき食事の時に言ったがお前はいまは局の保護施設にいるんだよな？」

「はい、フェイトさんも忙しいですし自宅に帰って来ない事も多いですから」

「ふーん」

何となく秋兄さんの方に体を転がすと秋兄さんは僕の方を見ていた
ビックリした

「あれだな、急いで泣きながら仕事をしているフェイトさんが目に
浮かぶ・・・エリオが待ってるうってな」

「泣きませんよ、フェイトさんは強い人ですから」

「なら泣き目だな。いわゆる萌え死にさせる勢いで」

否定できない！何か段々否定出来なくなってきている自分がいる

「そだな、うん、じゃあエリオも自然保護隊に来てみるか？」

「はい？」

話の流れが掴めなかった。突然過ぎるし突拍子過ぎる

自分がどんな顔で聞いているかが想像出来ない・・・夜でよかった
それにしたって突然過ぎて頭が付いていかない

「だから向こうで何してるか知らんが暇だろ？こつちならキヤロもフリードもシロも・・・まあ俺も居るし過ごしやすいかなって別にミッドへは普通に行けるからフェイトさんとも会えるしな」

「その、えと」

「すぐには言わんさ。主に俺がキヤロからの被害をお前に逸らしたいだけだからな。アハハ」

その理由はどうかと思っけど誘いはとても嬉しかった

「じゃ、寝るか。お前も寝ろよエリオ。おやすみ」

「おやすみです。秋兄さん」

おやすみと言い合っただけなのに心が温かい気持ちになった

が流石秋兄さん、ただでは終わらず・・・感動で暫らく起きていた僕を寝相で布団から蹴り出した

「くしゅん」

「エ……エリ……エリオ。エリオ君！」

「やうッ！フエイトさん?!」

「ふふ、キャラだよお。おはよう」

「あ、おはよう」

見渡すと秋兄さんの姿は見えない

キャラは笑顔で顔を拭く為の蒸れタオルを渡してくれた

「雨水さんならもう仕事に出たよ」

「え?!じゃあ僕ってもしかして寝坊しました?」

「ん〜特に早くおきないといけない訳でもないから寝坊じゃないかな」

キャラと一緒に簡易テントの外に出るとフリードとシロが寄ってくる

「キュクッ!」

「ガウッ!」

「二人ともおはよう」

他の自然保護隊の人達も既に外に行っており残ってる人は数人だった
女性ばかりで少し居心地が悪かった

「エリオ君はそのままミッドに帰るだろうけど雨水さんには会って
いく?」

「あ、その・・・また来るから別にいいかな」

「・・・うん。そうだね、またきてね」

この後、ミッドに帰ってすぐにキャロから画像付きメールが届いたので開いてみると僕と秋兄さんが仲良く二人で寝ている姿が映っていた

二十五話 side エリオ (後書き)

エリオのお泊りで親交が深まる回でした

二十六話 side 雨水

前回のあらすじ

俺の携帯端末のトップ画面がキャラの画像から変更できない 交渉を試みたが取り付く島無し 仕方ないので放置 色々あってエリオと寝ることに 年下だがエリオと話すのは結構良かった 別れは言えなかったがまた来るらしい

「で、此処は何処だ。マース・ヒューズ三等陸士殿」

「でつてお前さん、もしかして話も聞かずにノコノコ付いてきたのか？雨水秋春三等陸士殿」

「俺はお前を信じてるからな」

「信じるって不思議な言葉だよな、思ってもないのに言ってみれば大概の人間関係は如何にかなる」

「なに急に悟り開いてんだよ老け顔」

まあ老け顔と言うか現に俺より年上な訳だが

敬語とは敬意を表する言葉と書く、詰まる所はコイツにはいらん

「よしよし、同じ部署のヤツに雨水秋春は二桁にも達してない美幼

女の写真を個人端末のトップ画像に登録してるって広めてやんよ」

「やめえい」

「ふはは！止めたって遅いわ、ネタ帳に保存っと」

態々懐から手帳を取り出して本当に書き始めやがった、アナログめ！

「お前なんで態々手書きなんだよ。って何か落としたぞ？」

「あ！おい！馬鹿、拾うな！」

拾うなどは・・・拾えと言う意味だと俺は思っている

拾ってみるとカメラ視線でピースポーズを取った可愛い女の子が写っていた

「おめえ盗撮はアカンやろお」

「アホかッ！誰が盗撮だ！ちゃんと承諾は得ているわ！」

「これ背景は公園か？お前まさかその辺の・・・このロリコンめ！」

「娘！このちよープリティィキューティーラブリーエンジェル可愛い子は俺の娘だ！」

エンジェル以外は全部大雑把訳で可愛いって意味だと突っ込むべきか?!それとも何でそんな食い気味なんだって方を言うか?!

切り上げよう

とにかくこの話をさっさと切り上げないと面倒な事になると違う

「へ、へーそりゃ良かった」

「今年で十一歳でなく、この写真は八歳の時なんだがいまはもっと可愛いぞ?」

「あ、はい。そうですね」

「お前さんとこのキャラちゃんにも負けねえぜい」

ん?十一?確かヒューズの年齢は二十代後半、そこから大雑把に引いたら十代後半

子供作るの早すぎねえ?!管理局は子供の内から能力さえあれば仕事につけるし、そんな子供は子供らしからぬ大人びた感じになるだろうが幾らなんでもそれは無いだろう

「別に張り合おうとは思ってないんだが」

「お互い娘は可愛いってな」

「は？キャロはフェイトさんの娘か妹だ。俺は赤の他人で旅仲間」

「・・・お前さんは」

何だその残念なモノを見る目は、チヨキでシバくぞ

話は大きくずれてしまったが、俺はヒューズに連れられ管理外世界に來ている

理由としては、管理予定の管理外世界の視察。と言う話で俺は來ているはず

暫らく歩くと明らかに研究施設ですと言いたげな建物が見えてきた

これは可笑しい。ここは無人世界との事だったはずなんだが

「やっぱりか」

「何がだ、いい加減教えろ」

「あ、ああ、外れてたらこのまま観光といきたかったが如何やらそうも問屋は卸してくれねえって訳か」

「いいから説明しろ」

ヒューズの話を纏めると・・・これは特務で次元犯罪者が行なった違法実験の跡地であるアジトの調査及び可能であれば犯行の証拠を持ち去る事

・・・おいおい！何で俺やヒューズみたいなたつ端にそんな任務が回ってくる訳ですか？！

「ハハ、お前さんのいまの顔を見れば考えてる内容は大よそ検討は付くが勘違いしてもらっちゃ困るのはこの特務は俺におりた話つてところだな」

「・・・なら何で俺を巻き込む」

「ロストログア関係の事件なんだし鑑定士を連れて行って損はねえだろ？」

・・・嵌められた！！

二十六話 side 雨水 (後書き)

ヒューズのフルネームは変に捻るのも可笑しいのでそのまま持ってきました

二十七話 side 雨水

前回のあらすじ

ヒューズに騙された 以上！

「廃棄されたのは最近か」

「みたいだな、足場わりい」

砕けたガラスをじりじりと踏みながら進むと生体ポットの並ぶ部屋に辿り着く

「おいおい、マジかよ」

「こりゃあ、どデカイ当たりだな。予想通りとも言えるがな」

「予想してたんかい。何が入ってたんだろうな、コレ」

次元犯罪者が生体ポットを所持している理由なんて数える程にある訳じゃない

単に魔法生物を使った研究か、単に人間を使った人体実験か

どちらでも面倒で非道なのに代わりは無い

「ん？分からないのか？お前さんのその目でも」

「その、目・・・だと？」

「レアスキル。目に関係してるんだろ？使用時にコンタクト状の魔力膜が張られてる。色はお前さんの魔力光の白と茜を混ぜた感じの色ってところ、あたりだろ？」

マジか！

自分でも全く気付かなかった。ってか黒い目からそれを被せてあるんだから外からは殆ど見えねんじゃね？！

この際、何で俺が名目上レアスキル持ちって知っているかなんて気にしないようにしよう

「知ってるなら使っが」

観察眼のスイッチを入れて瞳を切り替える

生体ポット内部 血液反応 魔力資質Sランク相当

中身は人間だったらしい。辺りを一応見渡しておくか・・・

敵意 有り

敵意かぁー敵意敵意・・・てき、い？

「ヒューズ！やべっ、むががふっ」

「敵さんだろ？大声を出して如何するよって」

オプテックハイド 発動確認

いい加減視界がウザイので観察眼を切る

「幻術魔法って普通三等陸士が覚える魔法か？」

「このくらいなら基本技能だ」

あれ？そだっけ？

魔法が出来ないから割とちよっとした技能でも高く見えるんだろうか

暫らくすると円柱型のカプセル風機械がウロウロし始める、恐らくあの一つ目が赤く光ってるって事はセンサー式なんだろうな

ん？だけど何のセンサーか知らんが完全遮断できる程の幻術魔法は流石に基本技能じゃないだろうと思う

「なんで廃棄した場所に見回りを」

「ワザと廃棄した、とか？誘き出す為に」

「・・・そうか。一可能性としては有りだな、引くぞ」

「え？どうやって？滅茶苦茶ウロウロしてるんですけど・・・あの丸箱型一つ目機械」

「お前さんのネーミングセンスが分かった気がする」

しかしマジで如何するか数はざつと五体、武装は大きさから見て対人武装。一体一体はそこまで強くないはず

調査用っぽいし

都合が良い事にセンサーは完全に遮断できているからヒューズの魔力が尽きるまでは気付かれない

「さて、如何する」

「アイデアはあるかい？お前さんは一応魔法無しで何回かは戦ってきたんだろう？」

「アホか俺の武器は言葉だ。あんな会話無しで無言で発砲しそうな相手は無理。そっちは」

「基本的な魔法は一通りだけど補助型の魔導師だからなく期待は・・・

・な
」

交戦は難しいか

ま、最初から逃げる算段を立てるつもりだったから良いか

「お前武装は？なんか持ってたんだろ」

「最近AMFが流行ってるからって無理やり携帯許可を落として手に入れた小型銃とその弾倉一ダース」

「流行ってたのか？」

「ああ一応一部で、お前さんは？」

「使えない支給の杖が一本」

小型銃の装填弾数は二発。弾倉が二つて事は銃の中身を合わせて計十四か

「走った状態で何分くらい幻術は続く？」

「八分が限界」

帰り道まで走って倍は掛かるな

「アイツら奥に向かっているが入り口付近に伏兵はいると思うか？」

「如何だろうな。俺なら二体は配置する」

「ま、そりゃ突入部隊よりは少ないだろうからそんなもんだよな・
・うし！ならお前と俺の武器交換な！俺、魔法使えないし。そして
突破作戦を考えなせ！」

「大声つぽく小声とは器用だねえ」

まあな！危機的状況なら人間大概の事は出来るぜ！

二十七話 side 雨水 (後書き)

雨水の魔力光をサラッとだしてみました

二十八話 side 雨水

前回のあらすじ

廃棄された研究所を探索中囲まれる 丸箱型一つ目機械、五体に遭遇した！ が即逃げるを選択

「逆方向に向かってくれて良かったぜ」

「支給品の杖でもないよりはあった方が使える」

五分か

外に伏兵がいたらヒューズに倒してもらいたいし此処は魔力温存の為に

「ヒューズ、もう幻術解いても良いんじゃないか」

「・・・そうだな」

俺もヒューズも後ろを振り向いて追ってを振り切ったのを完全に確認すると止まる

そして走りから歩きに変える

「さて、外に居た場合は入り口を見張られてるから確実に逃げるって選択は出来ないだろうな」

「お前さん、さっきは策があるって」

あ、やべ。ヒューズを安心させて敵の前まで連れて行くこう作戦にさつそく亀裂が……

「さて準備準備」

廃棄研究所出口付近

俺達は現在予想通り待ち受けていた敵を隠れながら覗いている

「さて一人一体を相手取る。分かってるな」

「俺は良いが……お前さん。本当にそれで戦うのか？」

「もちろん」

「自然保護が聞いて呆れる」

「俺は命と自然を天秤に掛けるなら即命を取る」

ヒューズの深い溜息を合図に俺らはそれぞれ飛び出す

すぐに向こうは気づくが俺とヒューズの魔力弾で分断される

これで予定通り一対一の構図が完成

「さて、お前が俺の相手な訳だけど」

ヒュンと音がして俺のすぐ横を何かが通り背後で爆発

・・・こう、がくへいき？

ちよ！質量兵器じゃないの?!なんで光学兵器?!

「武装もちゃんと観察眼で見れば良かったーッ!」

ヒュンヒュンとレーザーが飛び交う

どうにもレーザーの標準がキチンとしてないのかまだ未成品なのか結構標的からブレている

俺は研究所から拝借した可燃性の謎の液体を取り出し投げ付けて銃

で爆発させる

「お？思いのほか・・・そうか普通に考えて機械は火に弱いか」

ダメ押しに残りの可燃性液体をぶちまけて爆破

見事こんがり丸箱型一つ目機械を一つ完成させた

「ああ、予想以上に被害が」

当然燃やしたは良いが消す方法など皆無の為、自然消火を待ちたいが・・・森の中だしな」

「そつちも終わったみたいってこりゃー派手にやったな」

「仕方ないだろ」

「報告書と始末書が・・・」

「俺は手伝わないからな」

後の報告では急遽消防隊を呼んだのでそれほど大きな被害にはならなかったが研究所の中にいた五体は発見出来なかったらしい

「夜間警邏？」

結局本局で軽い報告書と森を燃やした始末書を書いて帰ってくると突然おっちゃんに夜間警邏を頼まれた

何時もは昼間の警邏の為、夜間の仕事は初めてだと思う

「俺一人で？」

「いや、今回はキャラちゃんを見守る役としてお前に一緒に行ってもらおうと思ってる」

「なるほど確かに幾ら局員だろうと子供一人に夜間警邏は無いよな」

「そう言う事だ、引き受けてくれるな？」

「任せとけて！これでもキャラの子守にはかなり慣れてるんだぜ
！」

ん？でも此処の夜って街灯も無くなってかなり暗くなかったか？

二十八話 side 雨水 (後書き)

戦闘シーンが結構難しい

二十九話 side 雨水

前回のあらすじ

本局にて簡易的な報告書と始末書を書き終え自然保護に帰る。するとすぐにおっちゃんに出会って夜間の警邏を頼まれる。割と軽い気持ちで承諾。で現在に至る。

夜間警邏とは。ようは密猟者は昼夜待つてくれないので当然夜間の間も警戒を怠る訳にはいかないと云う訳での仕事なのだが

「真っ暗だな」

「よる、ですからね」

森の夜は俺の予想を遥かに超えて暗黒だった

「じつ言つと俺って暗いの苦手なんだよね」

「何となく感じます」

それにしても昔の人は木をお化けと勘違いしたそうだけど仕方ない！本当になんかお化けの類に見えそうだもん

ゆらゆらとマジ恐ええ

「帰りたい」

「あと少しです」

「大体誰もこんな夜中に来ねえって」

「そう言つとやってきそうだから止めてください」

確かにセリフ的にフラグっぽいか

お化けか密猟者が・・・どっちも会いたくはないな

「わたしより恐がつてどうするんですか」

「キャロ。あのな？幾つになつても怖いモノは怖いんだ」

「あれなんですか？雨水さん」

「木だ！木に違いない！むしろキャロの目が悪い！」

一瞬キャロの怒りが沸点に達した気がしたが気にせず手を掴みその場を走り去った

「まったく！あれが密猟者だったらどうする気なんですか！雨水さ
ん！」

「キャラ、俺らは何もなく見回りを終わらせた。OK？」

「いっぺん一人で行ってみます？」

キャラが黒い！いまはフリードもシロもないから物理的攻撃はな
いだろうけど何だかそれ以上にくるモノがある

「さ！わたしがついてますから見に行きますよ！」

「いやーもうキャラ一人で行くって選択はないかな？」

「女の子一人を暗い森にほつり込むつもりですか」

「・・・だよなー」

俺としては一向に構わないがそれを自然保護隊の皆にバレるとやば
い。ガチで一週間くらい一人夜間勤務になりそう

「キャラ話がある」

「聞きましょう」

「明日プリンとケーキ買ってくるから今日は止めよう」

「・・・だ・・・だめ、ですよ？」

あ、意外と揺らいだ

流石に確りしていてもまだまだ子供か

「こっちはそう言った店はないからな、最近食べてないだろ？」

「だ、だからなんですかつ、駄目ですよ！しごとは妥協しません！」

「んん？だがお前の見間違いだった可能性もあるよな？その可能性で話を進めるだけで甘い物が手に入るんだぜ？」

「うぐぐ」

「さあさあお年頃のキャラちゃん。甘いケーキは食べたくないかい？いまならアーンってしてやるよ？」

「くうう」

何でそこで拳を握るのが俺にはサツパリ理解出来ないがこれならイける！

何だかプルプルと震えて前に大人キャラからくらった魔力パンチを

思い出しそうになるけどいまは余裕の態度を崩さないようにしないと
交渉事の基本は余裕のポーカーフェイス

「しょ、しょうがないですね！わたしは何も見なかった！これで良いんですよね！！」

うし！ハラペコキャロの攻略なんてこんなもんよ！

「何かムカつく事をおもわれた気がします」

「気のせいだ。さ、帰ろう」

「恐がりな雨水さんのために手をつないであげますよ」

「そりゃありがたいね」

初めての夜間警護は何の事件も無く平和に終わった

・・・とは問屋が卸さなかった

「見張っていた、だと?!」

「当たり前だろうが新人の、しかもお前等みたいな若いのを二人だけで行かせる訳ねえって普通に考えたら分かる事だ」

後日、自然保護隊の女性陣には自腹で甘い物をご馳走する嵌めになり男性陣には雑用係りとして扱き使われた・・・俺だけ

え？キャラ口は？共犯だよね？

二十九話 side 雨水 (後書き)

そろそろ時系列的に原作へのカウントダウンなので入り方を考えないとなーと思いながらの執筆です

三十話 side 雨水

前回のあらすじ

最初から作り物と分かっているお化け屋敷と違ってリアルは怖い
何故かこう言うのは平気なキャラを連れて夜間警備 キャロが何か
発見したモノの俺が逃走 魔法がある世界なのだから幽霊がいても
可笑しくない 自然保護の全員にサボりがバレる 約一ヶ月のタダ
働き決定

「デートですね！」

「なにが、ですね、だ。俺の両手を見て言え」

あるのは大量の甘味系

前回の罰の女性陣へのプレゼントをミッドに買出し来ている

「荷物は男が持つそうですよ？」

「男女平等の世界だ」

「あ、そこお店に行きましょう！」

「聞けよ」

「ふう〜ようやくゆっくり出来るー」

「ふふ〜ん、わたしのおかげですよ」

・・・そうだな

二割くらいはお前のせいでこの状況だな

「そう言えばこの間、聞いた些細な話なんだがエリオの方が年上なんだってな」

「え？ほんとですか？」

「うん」

「ど、どしよ！年上の人に君とか言っちゃった」

「まあ上って言うても二ヶ月程度だけな」

だから年齢的には同じ九歳

九歳か、やっぱり周りからは俺とキャラは年の少し離れた兄妹くらいに見えるんだろうな

うんうん

「雨水さん」

「んあ？」

「食べさせてくれるって話じゃなかったですか？」

「さっきした」

恥ずかしかった

本当は周りはそんなに気にしていないのだろうけど精神的にくるモノがあった

「減る物じゃないですし」

「減る。俺の心って言うか精神って言うかその辺が減る」

「ならいいですね」

言い切った！？

カチャリと音を立てて俺の目の前に置かれるケーキ

「なあ」

「なんですか？」

「さつきも食べたよな」

「はい」

「ふとツ」

市街での魔法攻撃はミッドの法で厳格に規制されています

「シューター?!おまつ、申請無しに。バレたら」

「大丈夫です、管理局のひとも女の敵へのことうげきと言えば許してくれます」

そんな緩い組織になった覚えは・・・んーこの辺りを仕切ってるのは確かあそこの部署だったな

面識もあるし、もしかしたらその理由で通っちゃうかも

厳重注意は免れないにしてだろっけどね

「はあー」

「溜息を吐きたいのはこっちです、まったく雨水さんは」

「はい、キャラ。アーンして」

「まだとちゅ・・・あむ、ふあったくうひゅいはんわ」

ん、正面から見るとクリームを口に付けて美味しそうにケーキを食べる美少女

俺は結構役得なんじゃないか？

うん、そう思うと出費も安いと思えるな

「ひいてます？」

「全く全然これっぽっちも聞いてない」

待機スフィア十六

「わーデバイス無しで詠唱無し更にはほぼ無動作でこれなんて成長したねー」

「んぐ、はむ、誤魔化されませんよ」

「なら、はいアーン」

「あーん」

「美味しい？」

「ケーキに罪はないです」

美味いらしい

俺だけかも知れないが俺はケーキの細かい味に興味が無いので大概なら甘い、美味しい、美味しいと思うのでキャラの意見は結構参考になる

「結局なんの話だった」

「さあ？」

「ま、いつか。少し食べるペース上げるよ。お土産が駄目になっちゃう」

甘い物は別腹と言うけどもこれはもうご飯がサブで甘い物がメインって感じの勢いだよね

他の女性局員も少食の割に甘味系は確り食べるし、ってかむしろ飯を残してデザートのみ食べるなんて人も居たような・・・ま、別に学者じゃないし深く考えてもしようがないけどさ

「わかりました」

はあーこの大荷物をまた運ぶのか、キャ口は・・・手伝って、くれないよね

三十話〜side 雨水〜(後書き)

ケーキの好みはチーズケーキです・・・書く事が特にない。
感想待ってま〜す！

三十一話 side 雨水

前回のあらすじ

罰ゲームの買出し キヤロも付いてきた は良いが荷物を持ってく
れる訳ではなかった 真実は勢いで約束を果たす為だった 美少
女にアーン HPの限界です キヤロの魔法の成長が少し見れた
帰るとフリードとシロへのお土産を忘れていて噛みつかれた

「今日はおっちゃんとか」

「別に始めてって訳でもねえだろ」

「まあな」

今日はおっちゃんと共に警邏

男二人で・・・これならキヤロの方が断然マシだ

「そいやお前等が保護隊に来てもう結構経つな」

「半年以上か・・・もうちょいか？」

「最初はこんな餓鬼共に勤まるか不安だったが」

「そんな事思ってたのか」

「ああ、自然保護隊のシフトは不規則だからな。若い奴はどうも・
」

それで中年か物好きしか居ないのか

此処に来て新たな発見だ。俺もキャロも気にしてなかったから考えた事もなかった。かな？

「実際俺も家族をミッドに残してこっち来てるからなあ」

家族をミッドに残してねえー……かぞく？

「家族って父親母親の事か？」

「は？妻と娘に決まってるだろ」

「つま？」

「妻」

「むすめ？」

「娘」

「はあああああ？！！」

子持ちだったのかおっちゃん！いや年齢的には有り得る話ではあるがそんな話一度も聞いた事が・・・

いやまあ家族の話なんかしようとも思ってたけどさー

にしてももっと早く知る機会があっても・・・

「キヤロちゃんから聞いてないのか？」

「キヤロ?! 聞いてない聞いてない!」

「・・・ま、気にすんな」

「なんの励ましたコラア!」

絶対ワザとだ

帰って聞いたらたぶん「え? 保護隊のみんな知ってますけど雨水さん、もしかして・・・」とか言いそう。しかも笑って

・・・段々俺の中のキヤロが黒くなっていくなあ

あくまで俺の中でだけ・・・本人が聞いたら怒りそうだから悟られないようにしよう

「キャラちゃんと同じくらいの年だな」

「んーんー有り得ないな」

「喧嘩売ってるのか？売ってるよな？買うぞ？」

「さて、向こうも見て回るぞ」

おっちゃん何気にガタイは良い

流石密猟者を何人も相手取っただけあるな

「お？あれ、シロじゃないか？」

「シロだな、子供に囲まれて何時もの風景だ」

「ほお〜」

シロは女の子に人気だ、人形っぽいとかそんな感じだろうな

ちなみにフリードは男の子に人気。まあドラゴンって響きは何かがつけえよな

「キャラちゃんの使用術は凄いやな」

「ん？」

「魔狼つてのは本来プライドの高い生き物であんなに人懐っこくなるような動物じゃねえんだよ」

「あーそのことが」

「驚かないんだな」

「それはもう」

なんたつて幼くして真竜クラスの加護を得ている天才召喚士

鳥獣の類程度なら楽に手懐ける。本人の意思があるかは知らないけど

「ホントにお前とキャロちゃんの関係はよく分からねえんだよな」

「何処が、分かりやすいだろ。かなり」

「じゃあ口に出して言うてみる」

「旅仲間」

「じゃあ旅をしていない時はなんだつてんだよ」

・・・あ、確かに

三十一話 side 雨水 (後書き)

キャラとの関係性に未だに悩みます、兄妹って感じでも無いですしね

三十二話 side キャロ

自然保護、名前だけ聞けばとてもゆったりとしてそうな部隊ですが、その活動はとてもハードな一面を持っています

「その密猟者！ここは保護区域ですよっ！」

「うるせえガキ！」

「がき？」

どうして犯罪者の方々は口が悪い人が多いのでしょうか

私は保護隊の人達に連絡を取りながらマニュアル通りに密猟者を追い込みを掛ける

「フリード！」

「キユクル！」

成功の感覚を思い出すように腕の中の熊のぬいぐるみを抱きしめる
ちなみにぬいぐるみはバリアジャケット展開時に一緒に構成される
ように調整してもらった

「竜魂召喚！フリードリヒ！」

本来の姿を取り戻したフリードに跨って空から密猟者の姿を確認する

数は三名

それぞれバラバラに逃げている

それで追跡を振り切っているつもりなのだろうけど上から見れば誰が如何動いているかなんて一目瞭然

「わたしは直接は戦えないけど・・・皆をサポートする事くらいはできる！！」

私は連絡用の空間モニターを複数展開して保護隊の皆に指示を出した

密猟者は皆の連携によって被害も特に無く捕獲できた

一応私も頑張った訳ですから雨水さんから褒めてもらえるかなあー
なんて期待してキャンプに戻る

「大丈夫？」

「いや、うぶっ、無理、だい、くっ、ハードって」

「あらあら」

キャンプに到着すると雨水さんが女性局員に膝枕をしてもらいながらダウンしていた

・・・私が頑張ってる時にい

「雨水さん」

「ああ、キャラか」

「なんで雨水さんはわたしが頑張っていたのに女性の方と・・・その、良い感じになってるんですか？」

「はあー？なに、あーメンドクサ」

なっ！面倒って。この人は！

「ボコボコにしますよ？！」

「うげっ」

うげってそれが女の子に対する反応ですかって

「駄目ですよ雨水さん。そんな言い方だとキャラちゃんが誤解します」

「いや、マジ俺そんな体力残ってない」

「もう・・・あのね、何で雨水さんがこんな状態になってるかって言うとな?」

聞きましよう

ええ、もしかすると雨水さんの最後の弁護の可能性もあるんですから

「キャラちゃんの為に頑張ったからよ」

「え?」

「空を飛んでるキャラちゃんを必死に追い駆けてたらバテたんですって」

「ほ、ほんとですか?」

あれ?でも空から見てたけど雨水さんの姿なんて・・・

あ、雨水さんて魔法殆ど使えないから普通の一般男性並みだった

「じゃ、あとの看病はキャロちゃんに任せるわね」

「あ、ちょー！」

「明日になったら何処まで進展したか聞かせてね」

行ってしまった

「う、雨水さん」

「あう、なにい、マジきつ」

「ほ、ほんとにわたしの為に？」

「。。。。」

雨水さんは深呼吸をしてゆったりとダルそうに立ち上がると私の傍まできて軽く頭を手においた

「まーな、子供を守るのが大人の役目だし？ま、実際はこの有様だけどな」

暫らく私を撫でていた雨水さんが突然私に寄り掛かるように抱き着いてきた

当然慌てた私は見上げるように雨水さんを見る

「って気絶してる?!この人どれだけ全力出し切ってたんですか!」

慌ててさっきまで横になっていた場所にもって行く

お、おもいです

「なんで雨水さんは・・・いつも格好いいですけど何でこんなに残念な人なんでしょうか」

それとも私はこんな雨水さんが好きなんでしょうか?

三十二話 side キャロ (後書き)

ちよつとした原作との変更点、バリアジャケットにぬいぐるみ追加。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284x/>

高校生のリリカル爆走

2011年10月25日00時13分発行